三重県埋蔵文化財調査報告115－28

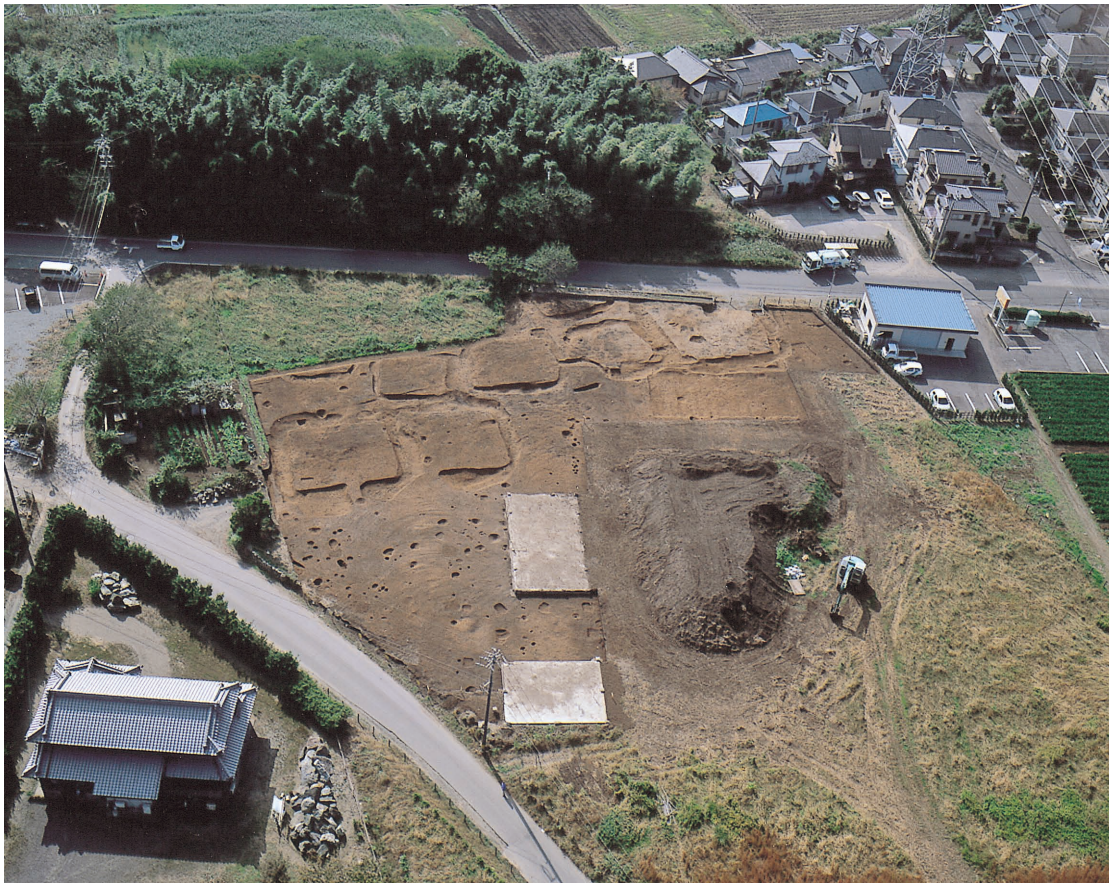
一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う

向山遺跡（第４次）発掘調査報告

２００９（平成２１）年２月

三重県埋蔵文化財センター

雲出川下流左岸（北から）



調査区全景（北から）

序

三重県のほぼ中央部を流れる雲出川流域では、おおよそ左岸が津市、右岸が松阪市となっています。この雲出川流域は、いにしえより西からの文化の影響をうけ、また東国への玄関口として多くの人の往来があり、重要な遺跡が数多く所在するところです。

本書は、一般国道23号中勢道路建設に先立って調査された向山遺跡の発掘調査報告書です。向山遺跡は、三重県津市高茶屋小森町に位置し、雲出川左岸の段丘面に立地します。今回の発掘調査では、弥生時代終末から古墳時代前期前半頃と想定される方形周溝墓が９基確認され、当時の墓制を考える上で重要な成果が得られました。

向山遺跡は道路建設により姿を消しますが、この発掘調査の成果が当時の地域史把握のための資料となり、少しでも歴史の解明の一助になれば幸いです。

平成２１年２月

三重県埋蔵文化財センター
所長　吉水康夫

例　言

1　本書は、三重県津市高茶屋小森町字向山に所在する向山遺跡の第４次発掘調査報告書である。

2　本書が扱う発掘調査の原因事業は、一般国道 23 号中勢道路建設事業である。

3　調査は、三重県教育委員会が国土交通省中部地方整備局から委託を受けて、平成 17 ～ 19 年度に実施した。調査費用は国土交通省中部地方整備局の全額負担による。

4　現地調査は、以下の体制で実施した。

調査主体　　三重県教育委員会
調査担当　　三重県埋蔵文化財センター
　　調査研究Ⅱ課　　主幹　上村安生　　主査　薗部英幸
　　主事　石井康晴　　技師　角正芳浩
土工作業委託　東海アナース株式会社
空中写真測量　株式会社かんこう

5　本書作成にかかる報文執筆は、角正芳浩・前野謙一・才木薫が担当、遺構写真は現地調査担当者、遺物写真は前野が撮影、編集は前野・才木が行った。

6　向山遺跡第２～４次発掘調査については、すでに『一般国道 23 号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報 18 ～ 20』（三重県埋蔵文化財センター 2007・2008）に調査概要を報告しているが、本書をもって正式報告書とする。

7　向山遺跡に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

凡　例

1　地図類について

・　本書で使用した地図類は、国土地理院発行１/ 25,000 地形図・津市都市計画図である。
・　これらの地図類は、平成 14 年４月から施行されている世界測地系・測地成果 2000 には対応していない。
・　挿図の方位は、世界測地系・測地成果 2000 による座標北で示している。

2　遺構について

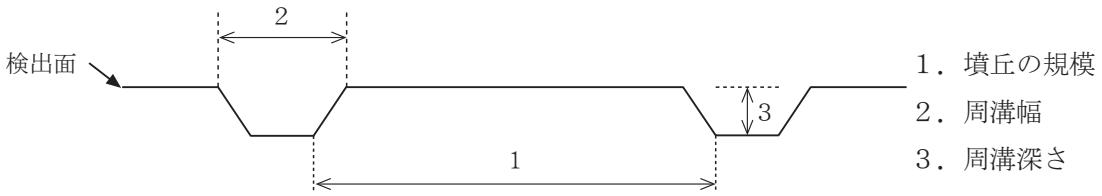
・　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（第 23 版　日本色研事業株式会社）を用いた。
・　遺構番号は通番となっており、調査時に付与したものをそのまま用いた。

3　本報告書で使用した遺構略記号は、下記のとおりである。

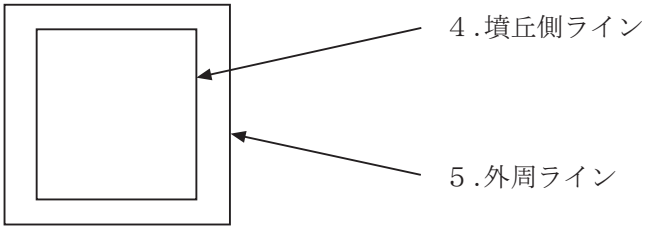
ＳＸ：方形周溝墓　　ＳＤ：溝　　Pit：柱穴・小穴

4　本報告書における方形周溝墓の規模・呼称については、以下のとおりである。

（断面図）



（平面図）



5　方形周溝墓の方位の表記は、北を基準にしている。

6　遺物について

- 遺物番号は、通番で付与した。
- 遺物実測図の縮尺は実物の１／４を基本とする。
- 当報告書での用語は「つき」は杯、「つぼ」は壺、「わん」は椀に統一している。
- 遺物観察表は、主に以下の要領で記載した。

報告番号・・・・挿図掲載番号

実測番号・・・・実測段階での登録番号

遺構出土位置・・遺物の出土した位置・遺構・層

計測値・・・・・「口径」は口縁部径、「底径」は底部径、「器高」は高さを示す。

（数値はそれぞれの部位の最大値）

調整・・・・・・主な特徴を外面（外：）・内面（内：）で示した。

胎土・・・・・・小石等の混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

焼成・・・・・・良と不良で区分した。

色調・・・・・・その遺物の代表となる色調を記載した。小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（第 23 版　日本色研事業株式会社）を基準とした色調を表現した。

残存・・・・・・12 分割した際の残存する割合。6 / 12 は約半分を示す。

特記事項・・・・その他、遺物の特徴となる事項

7　写真について

- 挿図と写真図版の遺物番号は対応する。
- 写真図版の遺物の縮尺は、不同である。

目　　次

Ⅰ　前　　言 …… （角正） …… 1
　1　中勢道路と埋蔵文化財保護
　2　調査の体制
　3　調査の経過
　4　調査の方法
　5　整理作業の方法
　6　文化財保護法にかかる諸通知
Ⅱ　位置と環境 …… （前野） …… 5
　1　地理的環境
　2　歴史的環境
Ⅲ　遺　　構 …… （才木） …… 11
　1　基本層序
　2　検出遺構
Ⅳ　遺　　物 …… （才木） …… 26
Ⅴ　ま　と　め …… （前野・才木） …… 29
　1　方形周溝墓について
　2　集落と墓域について
　3　方形周溝墓廃絶後の向山遺跡

挿　表　目　次

第１表　第２次調査結果一覧表 …… 2
第２表　第３次調査結果一覧表 …… 2
第３表　遺構一覧表（方形周溝墓）……25
第４表　遺構一覧表（溝）……25
第５表　遺物観察表 ……28
第６表　方形周溝墓の形態と築造時期 ……31

挿　図　目　次

第１図　第２・３次調査トレンチ配置図 …… 3
第２図　調査区地区割図 …… 3
第３図　向山遺跡周辺垂直写真 …… 9
第４図　遺跡位置図 ……10
第５図　遺構平面図 ……12・13
第６図　SX１・４平面図・土層断面図 ……14・15
第７図　調査区土層断面図 ……16
第８図　SX２・５平面図・土層断面図・断面図 ……18
第９図　SX３平面図・土層断面図・断面図 ……19
第10図　SX６・７平面図・土層断面図・断面図 ……20
第11図　SX８平面図・土層断面図・断面図 ……21
第12図　SX９平面図・土層断面図・断面図 ……22
第13図　SD10遺物出土状況図・土層断面図
　　SD13平面図・土層断面図 ……24
第14図　出土遺物実測図 ……27
第15図　方形周溝墓築造の順序 ……31
第16図　弥生時代後期から古墳時代前期の向山
　　遺跡 ……32

写真図版目次

巻頭　　雲出川下流左岸、調査区全景
図版１　調査区全景、調査区東側
図版２　SX１、SX１北辺東側周溝断面、
　　SX１北辺西側周溝・SD10断面、
　　SD10遺物出土状況、SX２遺物出土状況
図版３　SX１・４、SX２
図版４　SX２・３・５、SX３北周溝・SX４南周溝断面、
　　SX３北周溝断面、
　　SX３西周溝・SX５東周溝断面、
　　SX５遺物出土状況
図版５　SX８、SX９
図版６　調査区西側、SX７西周溝・SX９東周溝断面、
　　SX８北周溝断面、現地説明会の様子、
　　調査後の工事の様子
図版７　出土遺物①
図版８　出土遺物②

Ⅰ　前　言

1　中勢道路と埋蔵文化財保護

国道23号線は近年、交通量が増加し、中勢地区の経済発展の沈滞を招いていた。そのような交通集中の緩和と周辺の適切な土地利用の誘導、ひいては生活環境の整備を進めるため、バイパス建設が計画された。このバイパス「中勢道路」は、鈴鹿市玉垣町から松阪市小津町に至る、総延長33.8㎞の道路で、鈴鹿市・津市・松阪市の３市を通過する。

この計画地内の埋蔵文化財発掘調査については、昭和58年度に計画路線内の分布調査を行った。その結果をもとに、建設省中部地方建設局（当時、以下同）と三重県教育委員会が埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、現状保存が困難な遺跡は事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査主体は三重県教育委員会、調査は三重県埋蔵文化財センターが担当している。また現地作業は、調査の円滑を期して建設省中部地方建設局が社団法人中部建設協会に委託している。

事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・社団法人中部建設協会の三者で昭和63年４月８日付け「協定書」（９・10工区対象）を締結し、事業を推進してきた。その後工事計画の進展に合わせて、平成３年10月31日付けで「変更協定書（第１回）」（６工区追加）を、平成５年９月７日付けで「変更協定書（第２回）」を、平成10年３月31日付けで「変更協定書（第３回）」（新発見２遺跡の追加と期間延長）を締結し、調査計画と道路建設事業との調整を図った。平成10年度には、平成11年３月31日付けで改めて６・８～10・13（雲出川以南４遺跡）・14工区を対象とした「埋蔵文化財発掘調査協定書」（平成16年３月31日まで）を締結し、11年度以降の事業を推進することとした。

さらに、平成16年３月31日付けで「変更協定書（第１回）」を、平成18年３月30日付けで「変更協定書（第２回）」を締結し、三者体制は終了した。18年度以降は現地作業を含めた委託契約書が中部地方整備局と三重県で締結され、事業を推進している。

2　調査の体制

向山遺跡（第２・３・４次）の調査は、三重県教育委員会を調査主体とし、三重県埋蔵文化財センターが担当した。

現地調査は平成17～19年度に、報告書作成は平成20年度に行った。当該年度における中勢道路にかかる発掘調査体制は以下のとおりである。

【平成17年度】　調査研究Ⅱグループ
主幹兼グループリーダー　河北秀実
主　　査　上村安生・中川明・大塚匡基
主　　事　福島伸孝・淺尾太
技　　師　原田恵理子・水谷豊
臨時技術補助員　才木薫・川崎志乃
室内整理員　黒川敬子・太田浩子
森川絹代・北岡佳代子・山口香代・西山実公子
野田摩耶・中西千鶴・浜崎佳代・堀さや子

【平成18年度】　調査研究Ⅱ課
課　　長　田村陽一
主　　査　上村安生・大塚匡基
主　　事　淺尾太・石井康晴
技　　師　岡田実・原田恵理子
水谷豊・角正芳浩
臨時技術補助員　才木薫・豊田祥三
室内整理員　黒川敬子・太田浩子
森川絹代・北岡佳代子・山口香代・西山実公子
野田摩耶・中西千鶴・浜崎佳代・堀さや子

【平成19年度】　調査研究Ⅱ課
課　　長　田村陽一
主　　幹　上村安生
主　　査　薗部英幸
主　　事　淺尾太・石井康晴
技　　師　原田恵理子・水谷豊
角正芳浩・野嶌美沙子
臨時技術補助員　才木薫・小林俊之
室内整理員　黒川敬子・太田浩子
森川絹代・北岡佳代子・山口香代・西山実公子
中西千鶴・中村敬子・小倉靖子・浜崎佳代

【平成20年度】　調査研究Ⅱ課

課　長　田村陽一
主　幹　上村安生
主　査　薗部英幸
主　事　淺尾太・前野謙一
技　師　原田恵理子・水橋公恵
　　野嶌美沙子
臨時技術補助員　才木薫
室内整理員　黒川敬子・太田浩子
　森川絹代・北岡佳代子・山口香代・西山実公子
　中西千鶴・中村敬子・小倉靖子・浜崎佳代

3　調査の経過

第２次調査　平成17年11月28日から同年12月28日に実施した。遺跡をＡ～Ｄ地区に分け、そのうちのＢ地区とＣ地区を対象とし、幅約２ｍのトレンチを19箇所（Ｂ１～Ｂ11、Ｃ１～Ｃ８）設定して行った。調査の結果、Ｂ３トレンチ南端とＢ10トレンチにおいて溝と土坑が検出され、縄文土器・土師器・須恵器が出土した。（第１図・第１表）

第３次調査　平成18年10月16日から同年10月20日に実施した。調査は、幅約２ｍのトレンチを12箇所（Ａ１、Ａ２、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ１、Ｅ２、Ｆ１、Ｆ２、Ｇ、Ｈ１、Ｈ２）設定して行った。調査の結果、Ｆ１・Ｆ２トレンチで溝４条が検出され、縄文土器・土師器・須恵器が出土した。（第１図・第２表）

第４次調査　平成19年８月６日から同年11月29日に調査を実施した。調査対象範囲内に既存建物が存在したため、調査区を南北に分けて南側から着手し、建物撤去後、北側の調査を実施した。その結果、方形周溝墓９基を検出した。また、現地説明会を11月17日に開催し、約60名の参加があった。調査面積は、2,393㎡である。

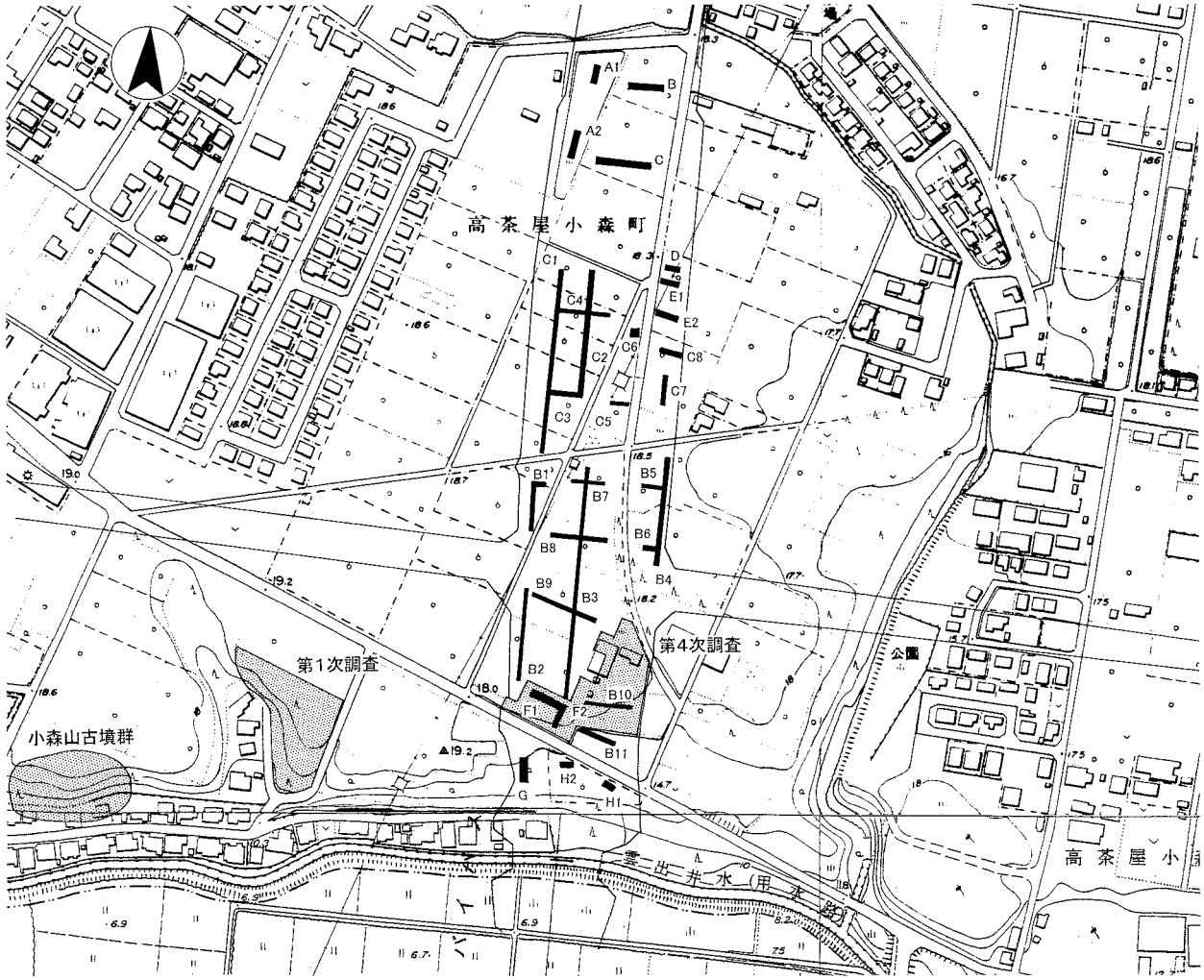
なお第１次調査については、平成６年３月25日から同年４月18日に、津市埋蔵文化財センターが、宅地造成に伴い600㎡の発掘調査を実施している。

トレンチNo	遺構上面深さ（cm）	遺構	遺物
Ｂ１	－	－	－
Ｂ２	－	－	－
Ｂ３	－	溝	土師器 須恵器
Ｂ４	－	－	－
Ｂ５	－	－	－
Ｂ６	－	－	－
Ｂ７	－	－	－
Ｂ８	－	－	土師器
Ｂ９	－	－	－
Ｂ10	0.1～0.3	溝 土坑	縄文土器 土師器,須恵器
Ｂ11	－	－	－
Ｃ１	－	－	－
Ｃ２	－	－	－
Ｃ３	－	－	－
Ｃ４	－	－	－
Ｃ５	－	－	－
Ｃ６	－	－	－
Ｃ７	－	－	－
Ｃ８	－	－	－

第１表　第２次調査結果一覧表

トレンチNo	遺構上面深さ（cm）	遺構	遺物
Ａ１	－	－	－
Ａ２	－	－	－
Ｂ	－	－	－
Ｃ	－	－	－
Ｄ	－	－	－
Ｅ１	－	－	－
Ｅ２	－	－	－
Ｆ１	0.1	溝２条	縄文土器 須恵器
Ｆ２	0.2～0.5	溝２条	土師器
Ｇ	－	－	－
Ｈ１	－	－	－
Ｈ２	－	－	－

第２表　第３次調査結果一覧表



第１図　第２・３次調査トレンチ配置図（1:4,000）

第２図　調査区地区割図（1:800）

4　調査の方法

地区の設定　調査にあたっては、４m四方を一区画とする小地区（グリッド）を設定した。各グリッドには、西から東へアラビア数字を、北から南へはアルファベットを付与し、グリッドの名称は両者の組み合わせで表記した。（第２図）

表土除去　表土の除去は、バックホーを用いて実施した。

遺構の検出・掘削　表土を除去した後、包含層掘削、遺構検出を人力により行った。その後、遺構の掘削を行った。

遺構カード　検出された遺構を小地区（グリッド）単位で重複関係等を記録し、遺物が出土した遺構については、出土月日・内容等も記載した。

遺構番号　遺構番号について、溝等複数のグリッドにかかるものについては調査区全体、ピットについては各グリッド毎に通し番号を付与した。

図面類の作成　土層断面図・遺物出土状況図は1/20および1/10の縮尺で作成した。全体遺構図・等高線図等は空中写真測量により作成した。

写真撮影　遺構写真は、４×５判ないしは６×９判、補助的に35ミリの各フィルムサイズで撮影した。フィルムの種類にはモノクロネガとカラーリバーサルを使用した。調査区遠景の空中写真には、４×５判と６×７判のモノクロネガとカラーリバーサルを使用した。

遺物写真には、６×９判のモノクロネガを使用した。

5　整理作業の方法

調査で出土した土器類は調査現場で取り上げ後、速やかに整理所で洗浄・乾燥・接合等の作業を行った（１次整理）。１次整理作業後、遺物の選別作業を行い、実測を行った。実測が終了した遺物については、報告書作成のため、レイアウト・報告番号付与・写真撮影が完了した後、報告書番号順に遺物整理箱に保管している。実測を伴わなかった遺物についても各出土遺構、包含層出土遺物についてはグリッド毎にまとめ、遺物整理箱に番号を付与し、保管・管理されている。

発掘調査によって得られた記録類（各図面・遺構カード・調査日誌・写真）および整理作業段階で作成した図面、写真類については、所定の管理番号を付与し、保管・管理している。

6　文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法にかかる諸通知は、以下のとおりである。

・文化財保護法第99条第１項

（県教育委員会教育長あて）

平成19年８月８日付け　　教理第168号

・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知

（津警察署長あて）

平成19年12月10日付け　教委第12－４－11号

〔参考文献〕

・津市教育委員会　『向山遺跡発掘調査報告』　2003
・三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』18　2007
・三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』19　2007
・三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』20　2008

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

地形　向山遺跡は、三重県津市高茶屋小森町に所在する[①]。津市は三重県中部に位置している。

三重県津市の地勢は、西に布引山地・高見山地・紀伊山地が連なり、東は伊勢平野・伊勢湾が広がる。全体的に西高東低の様相であり、雲出川の他に、岩田川・安濃川などの河川が、東流して伊勢湾に注いでいる。

津市の土地基盤は、布引山地にあたる榊原町西部の第三紀層（6500万年前から170万年前まで）がのびている。その東部には第四紀古層（170万年前から１万年前まで）が伊勢湾方面へのびており、戸木町、新家町、高茶屋小森町にかけて台地を形成している[②]。また雲出川流域の低地部は、第四紀新層（１万年前から現代まで）の沖積地が広がっている[③]。

向山遺跡は、このような第四紀古層で形成された高茶屋台地の雲出川下流左岸に位置する。今回の調査地は、標高約19ｍの段丘縁辺部にあたる。

雲出川は三重県西部と奈良県東部の境をなす高見山地の三峰山に源を発し、津市白山町で山間の地を離れ、伊勢平野に出て、津市一志町を通り、津市香良洲町付近から伊勢湾に注いでいる。延長距離は約55㎞であり、概して西から東へ流れている。雲出川と台地上に位置する向山遺跡との間には、幅約１㎞の沖積地が広がり、耕作地帯となっている。

高茶屋台地の北部には相川が流れ、垂水の丘陵との境をなしている。また高茶屋台地は、ゆるやかな西高東低の様相を示している。東部端において、天神川が台地を分断するような形で南北に流れている。南部は、台地裾に向かい傾斜面となり、北から南に向かって開口する大小様々な規模の谷が数本存在する。また、向山遺跡は台地南端中央部にある比較的大きな谷に挟まれた位置にあり、南側から見ると独立丘陵に近い地形である[④]。

交通　向山遺跡周辺の街道としては、伊勢街道と奈良道が存在した。

伊勢街道は、日永の追分（四日市市追分）で東海道から分岐して、白子（鈴鹿市白子町）、津（津市栄町）、六軒（松阪市六軒町）、松坂（松阪市日野町）、斎宮（明和町竹川）、更に伊勢湾沿いを南下し伊勢へと至る。その距離約71㎞になる。江戸時代末期「おかげ参り」の影響もあり、幹線道路として、にぎやかな街道であった[⑤]。

奈良道は、五百野（津市美里町）で伊賀街道と分岐し、長野川沿いに、久居城下を経て、雲出川を渡り、川原木造（松阪市嬉野川原木造町）へ出て、月本追分（松阪市中林町）で伊勢街道と合流する。その距離約16㎞である[⑥]。

また高茶屋台地には、久居城下町から東へ延長し、向山遺跡の北側数百ｍの地点を通り、台地南東端から下り、伊勢街道を横断し、伊倉津（津市雲出伊倉津町）へ至る東西の最短の道がある。またこの道と交差する南北のルートもあり、津市中心部と新家・木造等の集落を結んでいる[⑦]。

主要な街道とそれらをつなぐ道に関連していた高茶屋台地は、地名の由来のように茶屋の数が増えていき、交通の重要な場所であったと想定される[⑧]。

〔註〕
① 津市は、平成18年１月１日に、旧津市、旧久居市、旧河芸町、旧芸濃町、旧安濃町、旧香良洲町、旧一志町、旧白山町、旧美里村、旧美杉村の２市６町２村が合併し、新しく津市となった。
② 久居市史編纂委員会　『久居市史』上巻　1972
③ 土地基盤で表記しているが、第四基古層は更新世、第四紀新層は完新世に該当する。
④ 津市教育委員会　『向山遺跡発掘調査報告』　2003
⑤ 三重県教育委員会　『伊勢街道』　1986
⑥ 平松令三　『三重県の地名』　平凡社　1983
⑦ 津市教育委員会　『四ツ野Ｃ遺跡発掘調査報告』　1997
⑧ 前掲註⑥参照

2　歴史的環境

向山遺跡（1）周辺は注目すべき遺跡が密集している。そこで旧石器・縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世に分類して、簡単に述べておきたい[1]。

（1）　旧石器・縄文時代

雲出川下流において、確認された旧石器時代の遺物は極めて少ない。しかし、四ツ野Ｂ遺跡（2）でナイフ形石器が確認されている。

縄文時代の事例は近年の発掘調査により増加した。木造赤坂遺跡（3）・井手ノ上遺跡（4）では、晩期の竪穴住居や草創期の尖頭器が出土した[2]。四ツ野Ｂ遺跡や雲出島貫遺跡[3]（5）では、晩期の土器棺墓が検出された。大口北遺跡（6）では、時期未詳であるが竪穴住居が検出されている。その他、垂水Ａ遺跡[4]（7）では早期、向山遺跡では早期や晩期の遺物が出土している。

（2）　弥生時代

弥生時代になると、雲出川やその支流である中村川によって形成された沖積地、また向山遺跡周辺の台地上にも遺跡が分布するようになる。当遺跡にかかわりが深い弥生時代の遺跡について、特徴的な内容を記していく。

方形周溝墓[5]　雲出川右岸の筋違遺跡[6]（8）では、中期の方形周溝墓が検出された。左岸の長持元屋敷遺跡（9）では、中期前葉と想定される方形周溝状遺構が検出された。上野遺跡（10）では、後期の方形周溝墓が検出された。雲出島貫遺跡・前田町屋遺跡（11）では、弥生時代後期から古墳時代前期前半の方形周溝墓が検出された。なお、向山遺跡において、後期の方形周溝墓の可能性を示唆する溝１条が検出されている。

中村川流域において、片野遺跡（12）・鳥居本遺跡（13）・下之庄東方遺跡（14）・天白遺跡（15）では中期から後期の方形周溝墓が、小谷赤坂遺跡（16）では古墳時代前期初頭の方形周溝墓が、西野遺跡（17）では後期の方形台状墓が、それぞれ検出されている。

三渡川流域において、中ノ庄遺跡（18）では中期の方形周溝墓が検出された。田村西瀬古遺跡（19）では後期の方形周溝墓が検出されている。

その他、半田丘陵の高松Ｃ遺跡（20）においても、後期の方形周溝墓が検出されている。

生活跡　向山遺跡では、前期から後期の掘立柱建物10棟・柵４列、後期の竪穴住居１棟が検出されている。また四ツ野Ｂ遺跡では、後期から古墳時代中期にかけての竪穴住居が89棟検出されており、当時の生活跡の様相を示す中心地域として注目されている。長持元屋敷遺跡[7]では後期の竪穴住居が検出されている。雲出川左岸の沖積地において、木造赤坂遺跡・雲出島貫遺跡では、中期の竪穴住居が検出されている[8]。また、向山遺跡西側の丘陵上縁辺部沿いには新家遺跡（21）・牧遺跡（22）・巽ヶ丘遺跡（23）、北側台地上には本宮遺跡（24）が位置しており、それぞれ弥生土器が表面採集されている。

生業　雲出川右岸の筋違遺跡では、前期の畠と水田跡が確認され、当時の雲出川流域の生業の様相を示すものとして注目されている[9]。

銅鐸　雲出川流域では、２ヶ所の銅鐸出土地が知られている。津市白山町川口の銅鐸は、江戸時代発見の記録があるが、出土地点や所在場所など不明な点が多い。高茶屋銅鐸は、四ツ野Ｂ遺跡の集落の範囲内と考えられる地点より出土した。工事中に偶然発見されたため詳細については不明であるが、複数の銅鐸が入れ子になって出土したといわれている[10]。また、半田丘陵上の神戸・野田の２ヶ所で銅鐸が出土している。

（3）　古墳時代[11]

古墳時代前期の雲出川・中村川流域は、前方後方墳が集中している。西山１号墳（25）・筒野１号墳（26）・向山古墳（27）・錆山古墳（28）・庵ノ門１号墳（29）の５基は有力者の墓として想定される。その他にも、大塚山古墳（30）・片野池古墳群（31）・西野古墳群（17）など、前期を中心とした古墳が存在する。

半田丘陵東端部に位置する全長約87ｍの前方後円墳である池の谷古墳[12]（32）や、雲出川の流れと平行する形で位置する全長約33ｍの前方後円墳である善応寺山１号墳[13]（33）などは、中期の有力者の古墳として想定される。

雲出川左岸の四ツ野古墳（2）、小森山古墳群（34）、

上野古墳群（10）や、雲出川右岸沖積地の舞出北遺跡（35）、小野江甚目遺跡（36）では中期から後期を中心とした古墳群が確認されている。

高茶屋台地から垂水・半田の丘陵部では、土師器・須恵器・埴輪などの生産遺跡が存在する。久居窯跡群（37）は、須恵器の生産時期として中期、また法ヶ広古窯跡（38）や藤谷窯跡群（39）も中期から後期のものと考えられる[14]。

生活跡として、向山遺跡で前期の竪穴住居が１棟検出された。また四ツ野Ｂ遺跡は、弥生時代後期から古墳時代中期まで続く生活跡として注目される。高茶屋大垣内遺跡[15]（40）では、前期と後期を中心とした掘立柱建物群や竪穴住居が検出された。また近年の発掘調査により、木造赤坂遺跡・井手ノ上遺跡では竪穴住居が、池新田遺跡（41）では幅４～６ｍもある前期の大溝が検出された[16]。雲出川右岸の西肥留遺跡（42）・赤部遺跡（43）では、前期から中期の竪穴住居が検出されている[17]。

（４）　古代

古代律令制下において、この地域は一志郡に属していたが、向山遺跡が何郷にあたるか明確でない。また、木造赤坂遺跡に「八ノ坪」の坪名が残されているが、河川の氾濫等により、条里地割りの存在はほとんど確認されず、高茶屋台地上の地域にも条里遺構は検出されていないようである[18]。

古墳時代末期から平安時代にかけては、高茶屋大垣内遺跡と雲出島貫遺跡が注目される[19]。高茶屋大垣内遺跡では、竪穴住居・掘立柱建物・土師器焼成坑が検出され、「美濃」の刻印をもつ須恵器や土馬が出土した。雲出島貫遺跡では、比較的大型の掘立柱建物が検出され、墨書土器も出土している。また長持元屋敷遺跡では奈良時代の竪穴住居、木造赤坂遺跡では飛鳥時代から奈良時代の竪穴住居・掘立柱建物が、それぞれ検出されている[20]。

（５）　中世

中世のこの地域は、安濃津城を本拠地とする長野氏の勢力下にあった。一方、雲出川を境にその南側は北畠氏の勢力下にあった。このような状況を背景として、台地上や丘陵上には、池の谷砦跡（32）、小森上野城（44）、小森城（45）が築かれた。しかし永禄12年（1569年）、織田信長との和睦により、長野氏は徐々に勢力を失っていく。

（６）　近世

慶長13年（1608年）、藤堂高虎が津に入り、この地域は津藩領となった。寛永20年（1643年）と正保３年（1646年）の２度にわたる大凶作の後、津市戸木町に堰を設ける雲出井水工事を西島八兵衛が行い、慶安元年（1648年）に完成した。このことにより、雲出川下流の地域は干害の心配が少なくなり、水田地帯が増加した。

寛文９年（1669年）、２代目津藩主高次の隠居の際、嫡男高久が津藩を相続、その弟高通に５万石の分封が行われた。高通は現在の津市久居西鷹跡町を中心に、津藩の支藩である久居藩を築いた。その後、高茶屋台地周辺地域の大部分は久居藩領となった。また、久居城下町遺跡（46）の周辺には、伊勢街道、奈良道などの脇往還も整備され、高茶屋台地の通行量は相当多かったようである。

〔註〕

① 歴史的環境については以下の文献を参考にした。
・津市教育委員会　『津市遺跡地図』　1986
・久居市教育委員会　『久居市遺跡分布地図』　1984
・松阪市教育委員会　『松阪市遺跡地図』　2008
・津市教育委員会　『津市埋蔵文化財年報』９　2005
・津市教育委員会　『四ツ野Ｂ遺跡（第２次）・四ツ野古墳発掘調査報告』　2001
・久居市史編纂委員会　『久居市史』上巻　1972
・津市教育委員会　『向山遺跡発掘調査報告』　2003
※なお歴史的環境の各時代に明記されている向山遺跡の内容については第１次調査についてであり、上記の報告書を参考にした。

② 三重県埋蔵文化財センター　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』18　2007、同　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』19　2007、同　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』20　2008、同　『中勢道路調査ニュース』No.50　2008

③ 三重県埋蔵文化財センター　『嶋抜第１次調査』　1998、同『嶋抜Ⅱ』2000、同『嶋抜Ⅲ』2001

④ 津市教育委員会　『垂水Ａ遺跡発掘調査報告』　2000

⑤ 竹内英昭　「方形周溝墓」『三重県史資料編考古１』　三重県　2005

⑥ 三重県埋蔵文化財センター　『筋違遺跡発掘調査報告第１分冊』　2004

⑦ 久居市教育委員会　『長持元屋敷遺跡発掘調査報告』　1980

⑧ 前掲註②・③参照

⑨ 前掲註⑥参照

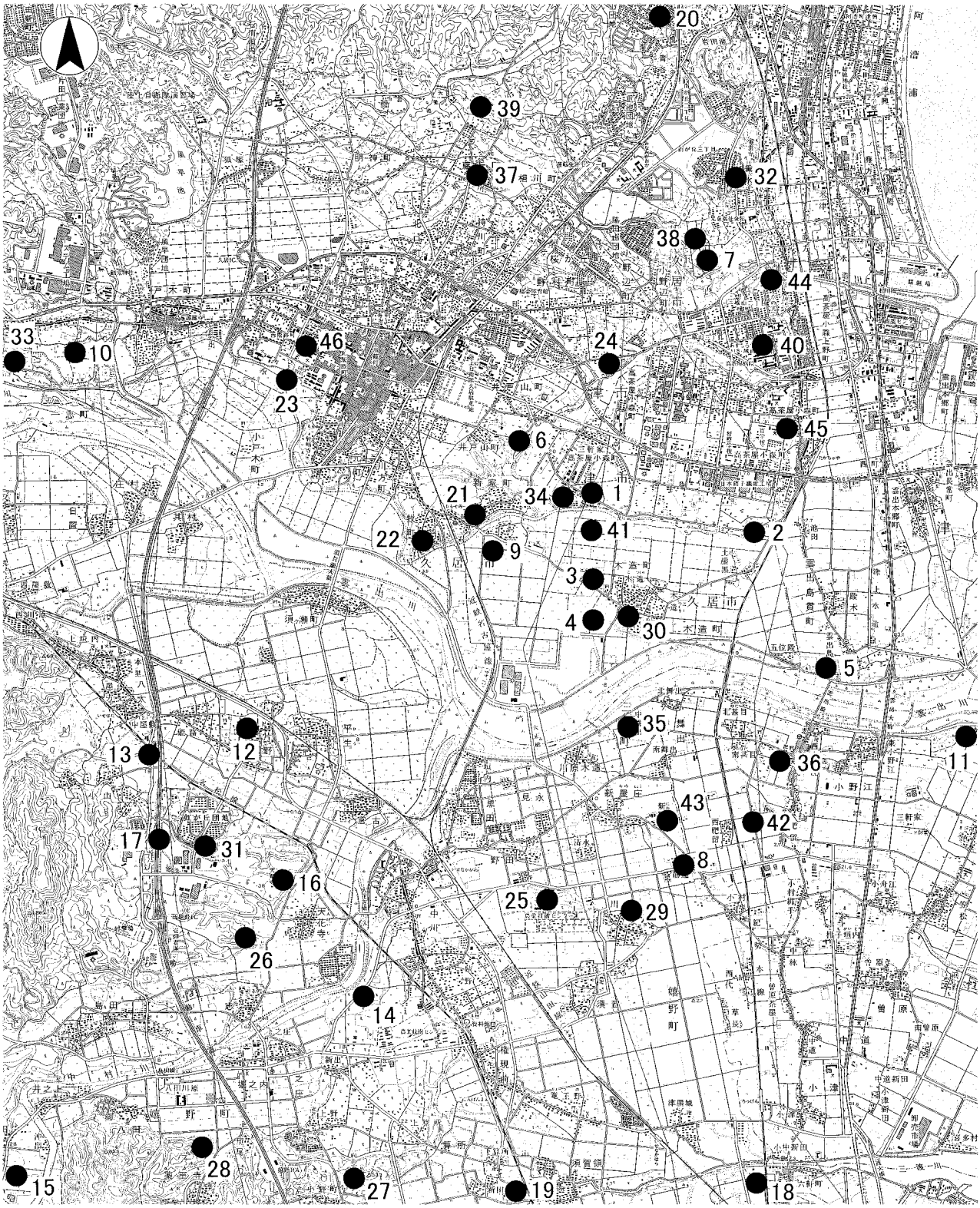
⑩ 中村光司　「高茶屋銅鐸観察ノート」『津市埋蔵文化財センター年報』４　津市教育委員会　2000

⑪ 八賀晋他　「古墳時代」『三重県史資料編考古１』　三重県　2005

⑫ 藤田充子　「津市池の谷古墳出土の円筒埴輪」『三重の古文化』81　三重郷土会　1999

⑬ 伊勢野久好　「善応寺山１号墳」『三重県史資料編考古１』　三重県　2005
⑭ 古墳時代における生産遺跡については以下の文献を参考にした。
・村木一弥　「久居窯跡群」『三重県史資料編考古１』　三重県　2005
・岡田登　「三重県津市垂水発見の埴輪窯についてー藤方の贄土器との関連をめぐってー」『皇學館論叢』　第15巻第２号　皇學館大学　1982
・村木一弥　「藤谷窯跡群」『三重県史資料編考古１』　三重県　2005
⑮ 三重県埋蔵文化財センター　『高茶屋大垣内遺跡（第２次）発掘調査報告』　1997、同『高茶屋大垣内遺跡（第３・４次）発掘調査報告』　2000
⑯ 前掲註②参照
⑰ 三重県埋蔵文化財センター　『西肥留遺跡発掘調査報告（第１・２・３・５次)』　2008、
松阪市教育委員会　『赤部遺跡』　2008
⑱ 平松令三　『三重県の地名』　平凡社　1983
⑲ 前掲註③・⑮参照
⑳ 前掲註②・⑦参照

第３図　向山遺跡周辺垂直写真（国土地理院発行1947年撮影、上が北、縮尺任意）



1 向山遺跡
2 四ツ野Ｂ遺跡／四ツ野古墳／高茶屋銅鐸出土地
3 木造赤坂遺跡
4 井手ノ上遺跡
5 雲出島貫遺跡
6 大口北遺跡
7 垂水Ａ遺跡
8 筋違遺跡
9 長持元屋敷遺跡
10 上野遺跡／上野古墳群
11 前田町屋遺跡
12 片野遺跡
13 鳥居本遺跡
14 下之庄東方遺跡
15 天白遺跡
16 小谷赤坂遺跡
17 西野遺跡／西野古墳群
18 中ノ庄遺跡
19 田村西瀬古遺跡
20 高松Ｃ遺跡
21 新家遺跡
22 牧遺跡
23 巽ヶ丘遺跡
24 本宮遺跡
25 西山１号墳
26 筒野１号墳
27 向山古墳
28 錆山古墳
29 庵ノ門１号墳
30 大塚山古墳
31 片野池古墳群
32 池の谷古墳／池の谷砦跡
33 善応寺山１号墳
34 小森山古墳群
35 舞出北遺跡
36 小野江甚目遺跡
37 久居窯跡群
38 法ケ広古窯跡
39 藤谷窯跡群
40 高茶屋大垣内遺跡
41 池新田遺跡
42 西肥留遺跡
43 赤部遺跡
44 小森上野城
45 小森城
46 久居城下町遺跡

0 2km

第４図　遺跡位置図（1:50,000）（国土地理院発行２万５千分の１地形図「津東部」「津西部」「松阪港」「大仰」より）

Ⅲ　遺　構

1　基本層序（第７図）

調査区は段丘縁辺部に位置しており、東側には龍ヶ谷と呼ばれる比較的大きな谷が、南側の段丘下に向かって開口する。そのため調査区は南東方向に傾斜しており、遺構検出面における北西隅と南東隅の比高は約1.4mを測る。調査区北部、西部はそれぞれ宅地、駐車場に利用されており、これらの造成土直下で明黄褐色粘質土（地山）が確認できた。調査区南東部は現代耕作土、暗灰黄色土下で明黄褐色粘質土が確認できた。遺構は全て明黄褐色粘質土上面から掘り込まれており、遺構検出はこの層の上面で行った。

2　検出遺構（第５図）

調査では方形周溝墓９基と溝４条を検出した。方形周溝墓は互いに近接し、周溝を共有したり周溝の一部に重複が見られたりする部分もあるが、他の周溝墓の墳丘を破壊して築造されているものはない。盛土は残存せず、埋葬施設の痕跡も認められない。周溝の深さは平均して35㎝程で、かなりの削平を受けていると想定できる。遺物は、周溝埋土からの混入と見られる縄文土器と、飛鳥時代の土師器・須恵器が出土した。このことから、段丘上の土砂の堆積の進行はかなり遅く、飛鳥時代においても周溝が完全に埋没するに至っていない状況が読み取れる。

方形周溝墓からは供献された遺物、もしくは墓に関連して行われたであろう様々な儀礼で用いられたと考えられる遺物は出土していない。したがって出土遺物の時期をもって周溝墓の築造時期を推定することはできない。しかし、周溝の重複や共有の状況①、主軸方向などから考えられる造墓の変遷と、周溝墓の形態から類推される時期を考慮すると、全て弥生時代終末から古墳時代前期前半の範疇に収まると考えられる。これらの分析は第Ⅴ章でまとめて取り扱うこととし、ここでは遺構の種類毎にその主な特徴を記述する。詳細については遺構一覧表（第３・４表）を参照されたい。

＜方形周溝墓＞

ＳＸ１（第６図）

概要　調査区北東部で検出した。北周溝中央を掘り残し陸橋とする方形周溝墓である。墳丘規模は東西11.5m×南北10.5mでほぼ正方形を呈する。西周溝をＳＸ４と共有する。

周溝　南周溝は後世の撹乱により判然としないが、第２次調査Ｂ10トレンチにおいてこの部分にも溝が認められたため、南周溝は途切れず存在していたと考えられる。したがって、周溝は北辺中央部に設けられた陸橋を除き全周する。

周溝の墳丘側ラインは直線的であるのに対し、外周ラインは中央部が外方に膨らむ形状を呈する。これは西周溝で特に顕著である。こうした形状のため、周溝コーナーは幅が狭く浅くなる傾向がある。また、陸橋両側の周溝は外側へ大きく拡張され、その結果陸橋の長さは4.0mに達しており、陸橋を強く意識している様子が窺われる。

周溝埋土には、墳丘側最下層に地山起因の橙色粘質土層もしくは黒色～黒褐色土に橙色粘質土ブロックが混在する層が見られる。これは、地山を掘削して墳丘に積み上げた墳丘盛土が、崩落して堆積したものと考えられる。

出土遺物　西周溝及び陸橋東側の周溝から７世紀後半の土師器・須恵器が出土した。

ＳＸ２（第８図）

概要　調査区南東部、ＳＸ１の南側に位置する。南側の大部分は大きく削平されている。墳丘規模は東西約7.5mである。

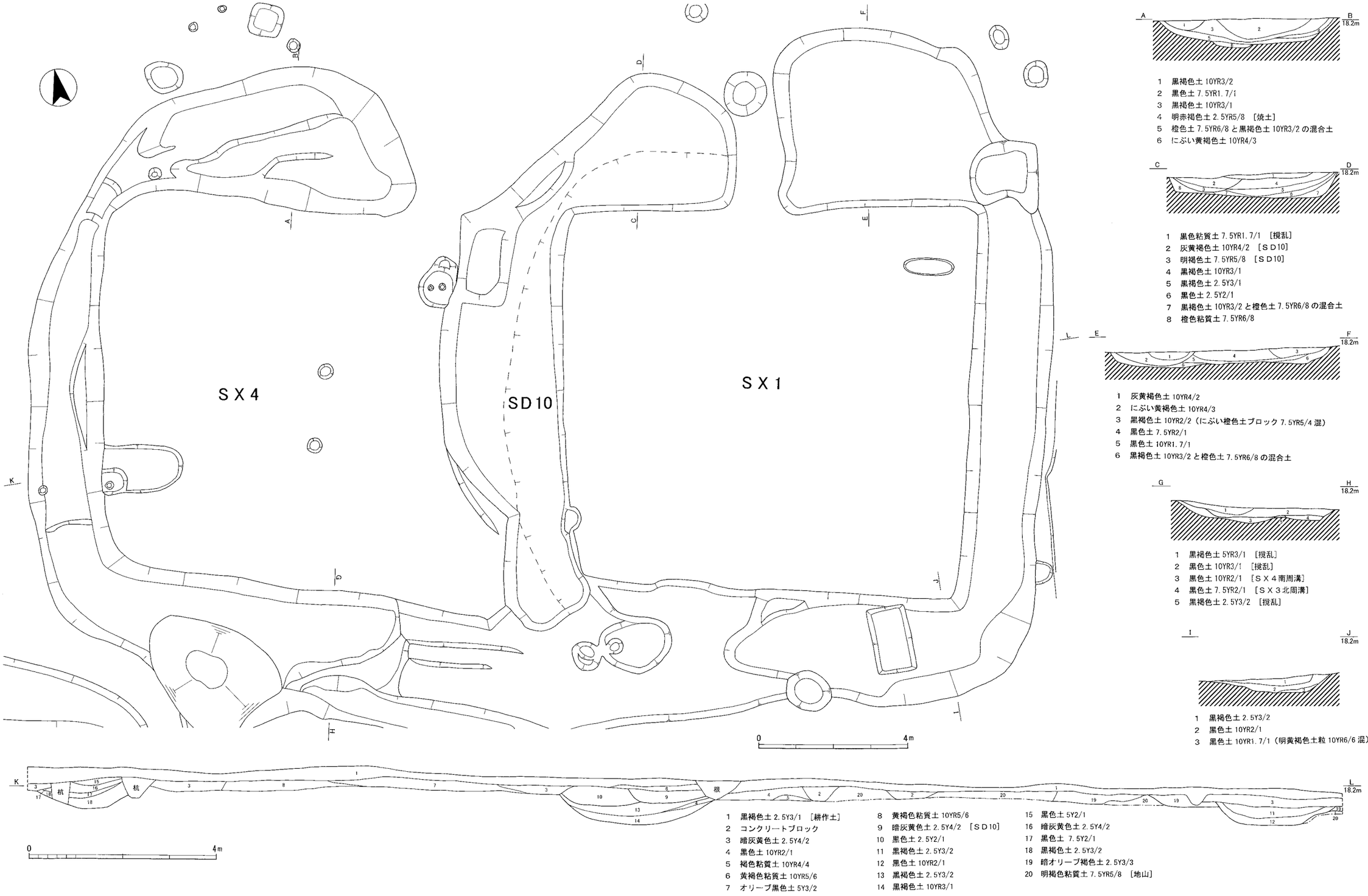
周溝　北周溝と東西周溝へと屈曲するコーナーを検出した。周溝幅は一定ではなく北～北東コーナーで1.5m、北西コーナーで0.6mである。

周溝の墳丘側ライン、外周ラインとも後世の撹乱により判然としない。

周溝埋土は黒色～黒褐色土層が水平堆積しており、一定方向からの流入の状況は窺えない。

出土遺物　北周溝から混入と見られる縄文土器と、７世紀後半の土師器杯１個体と甕３個体がまとまっ

第５図　遺構平面図（1:250）



A — B　18.2m

1　黒褐色土 10YR3/2
2　黒色土 7.5YR1.7/1
3　黒褐色土 10YR3/1
4　明赤褐色土 2.5YR5/8　［焼土］
5　橙色土 7.5YR6/8 と黒褐色土 10YR3/2 の混合土
6　にぶい黄褐色土 10YR4/3

C — D　18.2m

1　黒色粘質土 7.5YR1.7/1　［撹乱］
2　灰黄褐色土 10YR4/2　［ＳＤ10］
3　明褐色土 7.5YR5/8　［ＳＤ10］
4　黒褐色土 10YR3/1
5　黒褐色土 2.5Y3/1
6　黒色土 2.5Y2/1
7　黒褐色土 10YR3/2 と橙色土 7.5YR6/8 の混合土
8　橙色粘質土 7.5YR6/8

E — F　18.2m

1　灰黄褐色土 10YR4/2
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3
3　黒褐色土 10YR2/2（にぶい橙色土ブロック 7.5YR5/4 混）
4　黒色土 7.5YR2/1
5　黒色土 10YR1.7/1
6　黒褐色土 10YR3/2 と橙色土 7.5YR6/8 の混合土

G — H　18.2m

1　黒褐色土 5YR3/1　［撹乱］
2　黒色土 10YR3/1　［撹乱］
3　黒色土 10YR2/1　［ＳＸ４南周溝］
4　黒色土 7.5YR2/1　［ＳＸ３北周溝］
5　黒褐色土 2.5Y3/2　［撹乱］

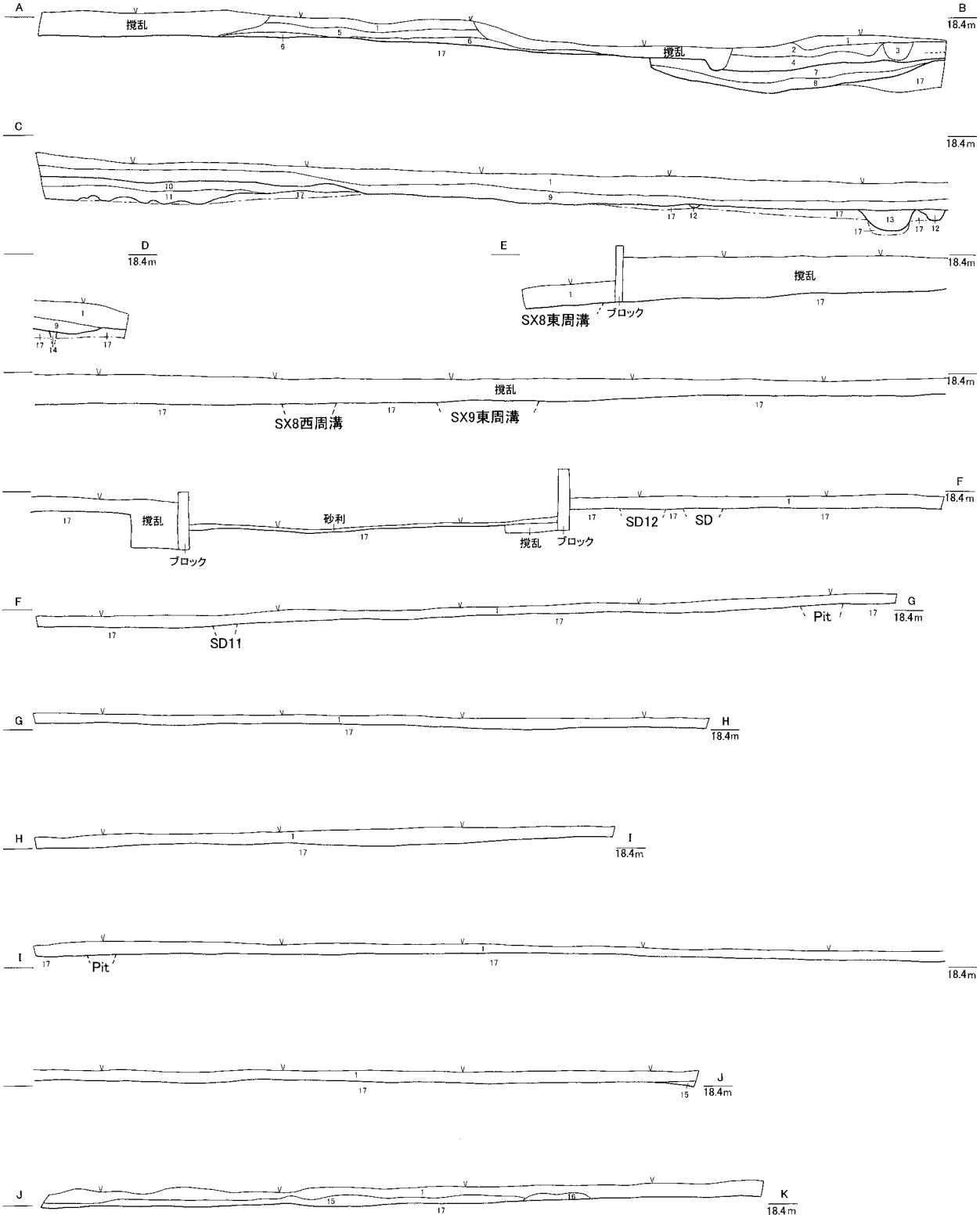
I — J　18.2m

1　黒褐色土 2.5Y3/2
2　黒色土 10YR2/1
3　黒色土 10YR1.7/1（明黄褐色土粒 10YR6/6 混）

K — L　18.2m

1　黒褐色土 2.5Y3/1　［耕作土］
2　コンクリートブロック
3　暗灰黄色土 2.5Y4/2
4　黒色土 10YR2/1
5　褐色粘質土 10YR4/4
6　黄褐色粘質土 10YR5/6
7　オリーブ黒色土 5Y3/2
8　黄褐色粘質土 10YR5/6
9　暗灰黄色土 2.5Y4/2　［ＳＤ10］
10　黒色土 2.5Y2/1
11　黒褐色土 2.5Y3/2
12　黒色土 10YR2/1
13　黒褐色土 2.5Y3/2
14　黒褐色土 10YR3/1
15　黒色土 5Y2/1
16　暗灰黄色土 2.5Y4/2
17　黒色土　7.5Y2/1
18　黒褐色土 2.5Y3/2
19　暗オリーブ褐色土 2.5Y3/3
20　明褐色粘質土 7.5YR5/8　［地山］

第６図　ＳＸ１・４平面図（1:100）、土層断面図（1:80）



1　黒褐色土 2.5Y3/1　［耕作土］
2　黒褐色土 7.5YR3/1
3　暗灰黄色土 2.5Y4/2　［攪乱］
4　上層：暗灰黄色土 2.5Y4/2
　　下層：暗オリーブ褐色土 2.5Y3/3
5　黒褐色土 10YR2/2
6　黒褐色土 7.5YR3/2
7　黒褐色土 10YR2/2　［ＳＤ13］
8　黒褐色土 7.5YR3/2（地山混）　［ＳＤ13］
9　暗灰黄色土 2.5Y4/2
10　黒褐色土 2.5Y3/2　［ＳＸ１東周溝］
11　黒色土 10YR2/1　［ＳＸ１東周溝］
12　黒色土 2.5Y2/1 と明黄褐色土 2.5Y7/6 の混合土
13　黒色土 2.5Y2/1
14　黒色土 2.5Y2/1 と明黄褐色土 2.5Y7/6 の混合土
15　黒褐色土 2.5Y3/1（褐色土 7.5YR4/4 混）
16　黒褐色土 7.5YR2/2（黒褐色土 2.5Y3/1 混）
17　明黄褐色粘質土 10YR6/6　［地山］

0　4m

第７図　調査区土層断面図（1:100）

て出土した。

ＳＸ３（第９図）

概要　調査区南東部で検出した。ＳＸ２の北西側に位置する。南東コーナーが削平されているが、おおむね全形を窺うことができる。墳丘規模は東西8.2m×南北7.7mである。

周溝　削平された南東コーナーを除き全周する。北周溝がＳＸ４南周溝と近接するが、後世の撹乱により重複関係の有無を確認するには至らなかった。北・東・南周溝が幅1.0～1.2mでおおむね均一であるが、西周溝は幅2.0mで他の部分より幅広く掘削されている。西周溝中央部はＳＸ５東周溝と一体となっているが、南北端は枝分かれしている。土層断面には溝の重複が見られず、相互の新旧関係を窺うことはできない。しかし墓という遺構の性格上、２基が同時に築造されたとは考えにくい。旧の墓が築造され溝が埋没しないうちに、新の墓が旧のものと軸方向を同じくし、また溝を連結させて築造されたと考えるのが妥当であろう。したがって、両者の築造時期に大きな隔たりはなかったと考えられる。

周溝の墳丘側、外周ラインともややいびつである。深さはコーナーが浅く、中央部が深くなる傾向を示している。

土層の堆積状況には一定方向からの流入は見られないが、北周溝最下層に墳丘崩落土と考えられる黒色土に地山が混合した土層の堆積が確認された。

出土遺物　北周溝から混入と見られる縄文土器が出土した。

ＳＸ４（第６図）

概要　調査区東部で検出した。ＳＸ１の西側、ＳＸ３の北側に位置する。北東コーナーを掘り残し陸橋とする方形周溝墓である。墳丘プランはＳＸ１西周溝に制約を受け、西側が内側に大きく湾曲した形状を呈する。規模は中央部で東西10.0m×南北11.0mである。

周溝　北東コーナーに設けられた陸橋を除き全周する。東周溝をＳＸ１と共有するが、土層断面では飛鳥時代の新しい遺構以外に重複は認められない。これは、東周溝に、もともとそこに存在したＳＸ１西周溝を利用し、新たな周溝を掘削することを省略した結果と考えられる[②]。したがってＳＸ１より後に築造されたことになる。

周溝の墳丘側ラインは東辺を除き直線的であるのに対し、外周ラインは中央部がやや外方に膨らむ形状を呈する。したがって北西・南東コーナーは幅が狭く浅くなっている。陸橋西側の周溝は大きく外側へ拡張され、その結果陸橋の長さは3.8mに達している。ＳＸ１同様、陸橋を強く意識している様子が窺える。

北・西周溝の堆積状況から、周溝下層での墳丘側からの土砂の流入が窺える。特筆すべき点として、陸橋西側の周溝埋土下層に薄い焼土層が見られることが挙げられる。今回の調査では方形周溝墓と数条の溝以外に遺構は検出されていないため、この焼土は方形周溝墓に関わるものであったと推測される。

出土遺物　北周溝上層から須恵器高杯が出土した。

ＳＸ５（第８図）

概要　調査区中央部南寄りで検出した。ＳＸ３の西側、ＳＸ７の東側に位置する。南東部が削平され全形を窺うことはできない。墳丘規模は東西10.4m×南北9.4mである。西周溝とＳＸ６南周溝に重複がみられ、ＳＸ６より先に築造されたことが分かる。

周溝　削平された南東部を除き全周する。東周溝中央部がＳＸ３西周溝と連結するが、両者の間には重複関係がない。同時築造の可能性は低いものの、時期的な隔たりはごく小さいものであったと考えられる。

周溝の墳丘側ラインはややいびつであるが、外周ラインは北・西辺で外側へ膨らむ。そのため中央部は幅が広く、コーナーは幅が狭くなる。

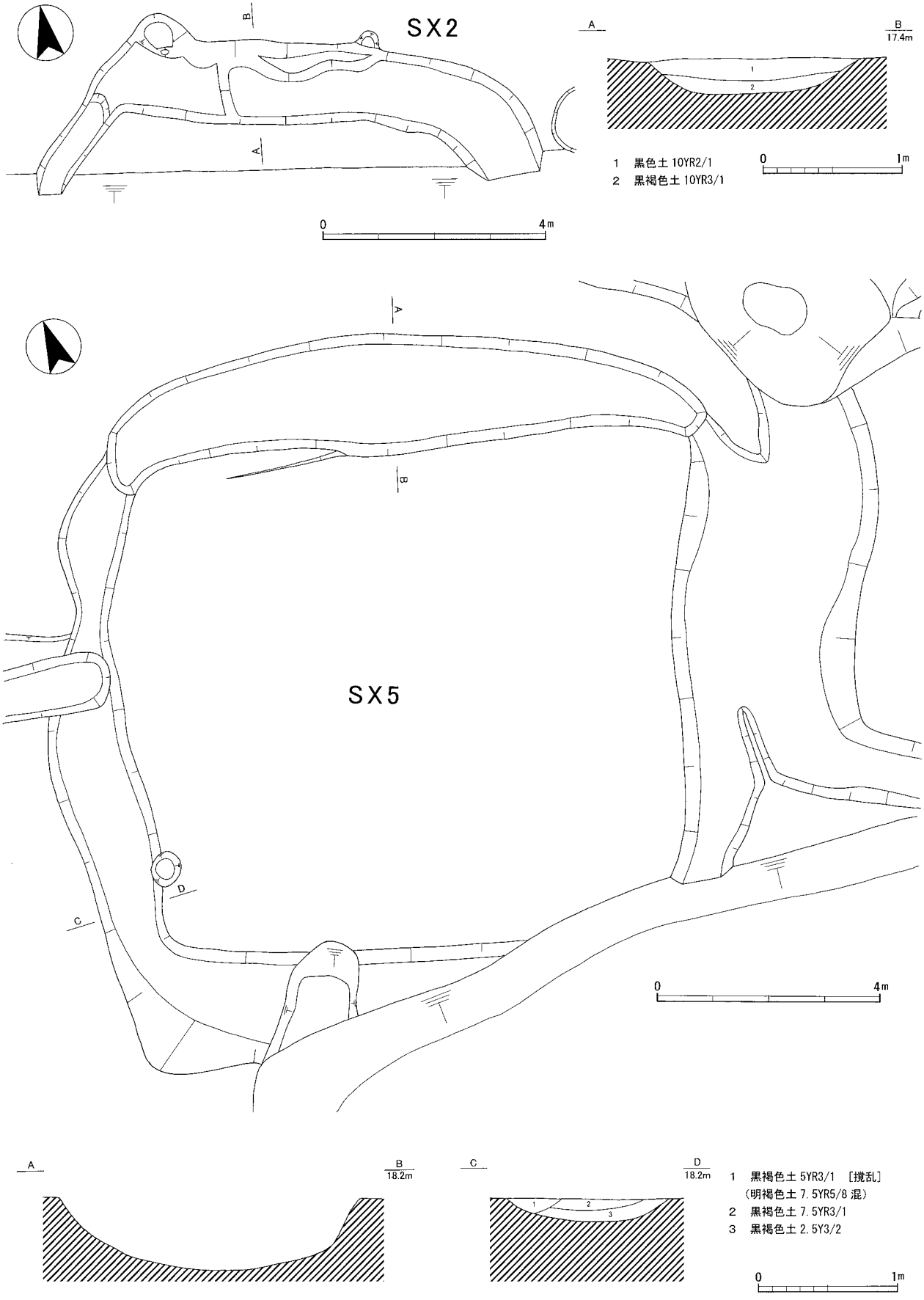
東西周溝は幅1.5m前後、南北周溝は幅2.0m前後で、南北周溝を幅広く掘削している。埋土は黒色系土壌がほぼ水平堆積する。

出土遺物　東周溝上層から須恵器平瓶が出土した。

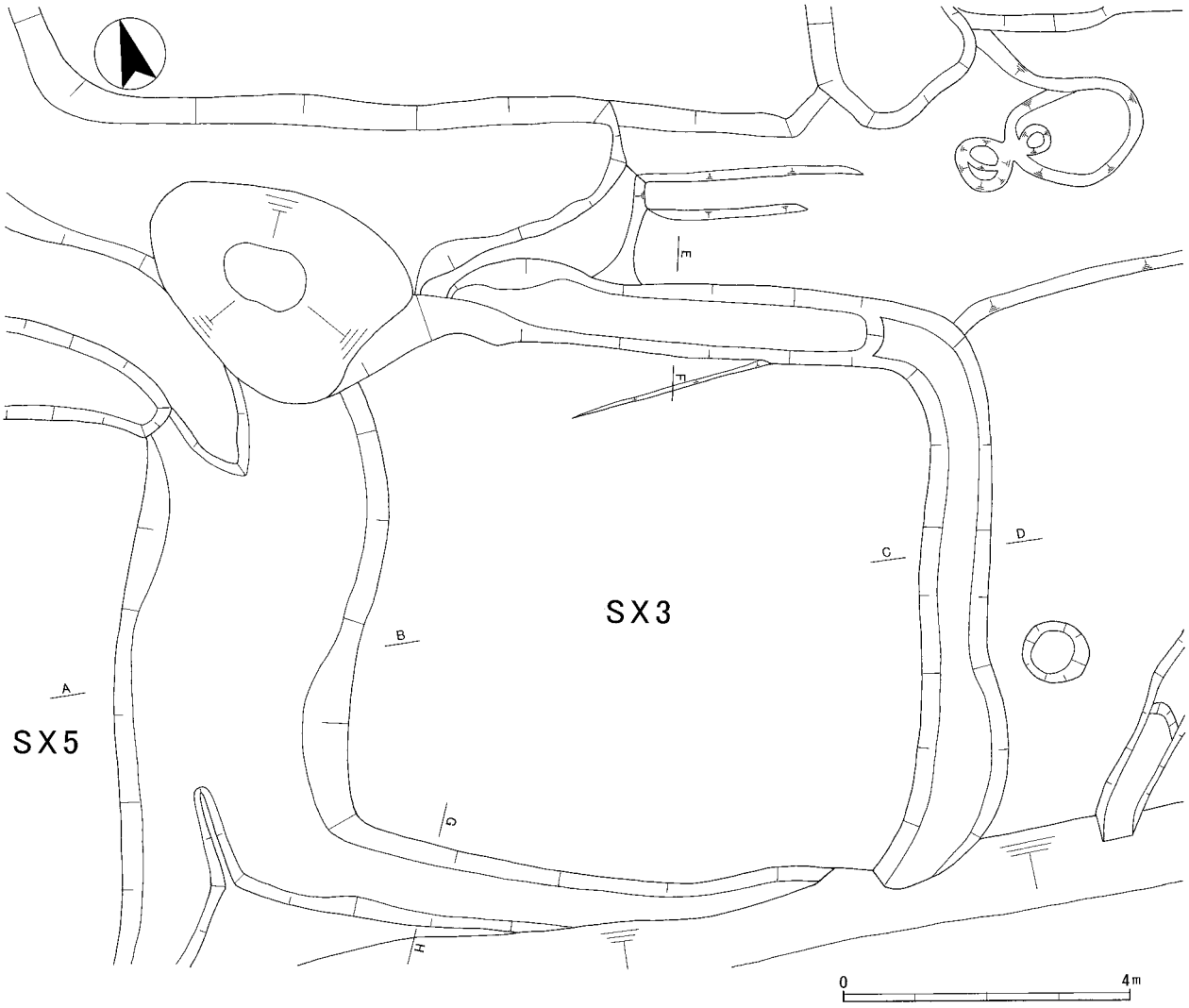
ＳＸ６（第10図）

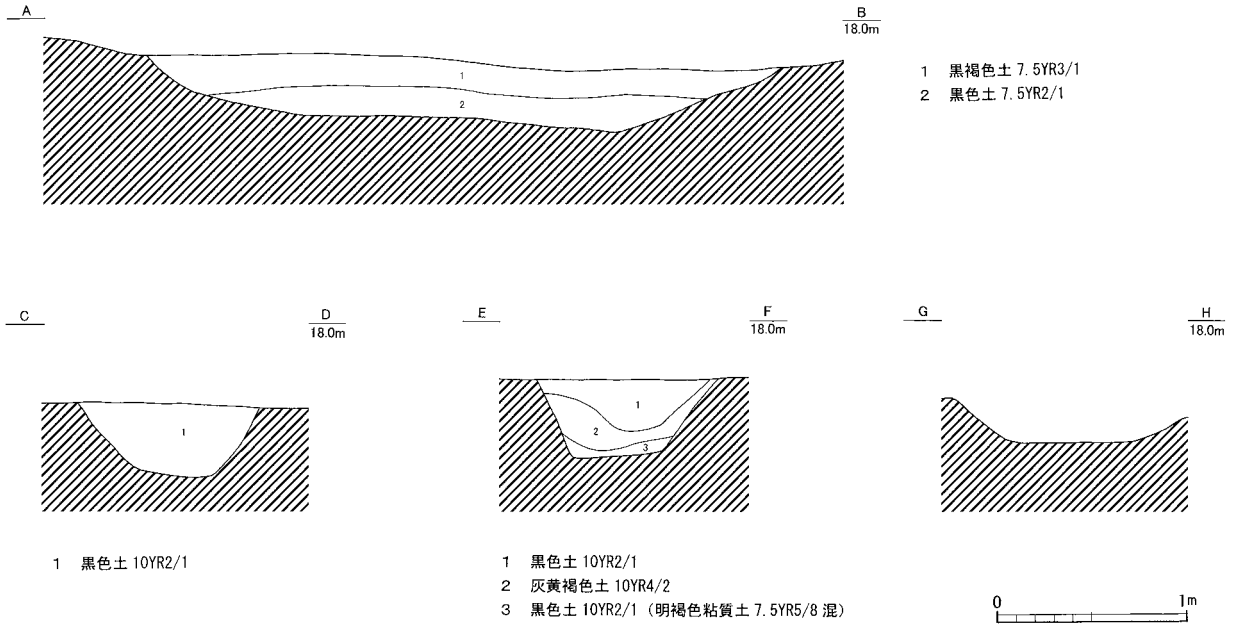
概要　調査区中央部で検出した。ＳＸ５の西側、ＳＸ７の東側に位置する。南周溝東端がＳＸ５西周溝と重複しており、ＳＸ５より後に築造されたことが分かる。

周溝　湾曲したＬ字形の南西周溝と、直線的な短い北周溝を検出した。北周溝と西周溝は連結しない。南周溝東端がＳＸ５西周溝と重複関係にあり、ＳＸ

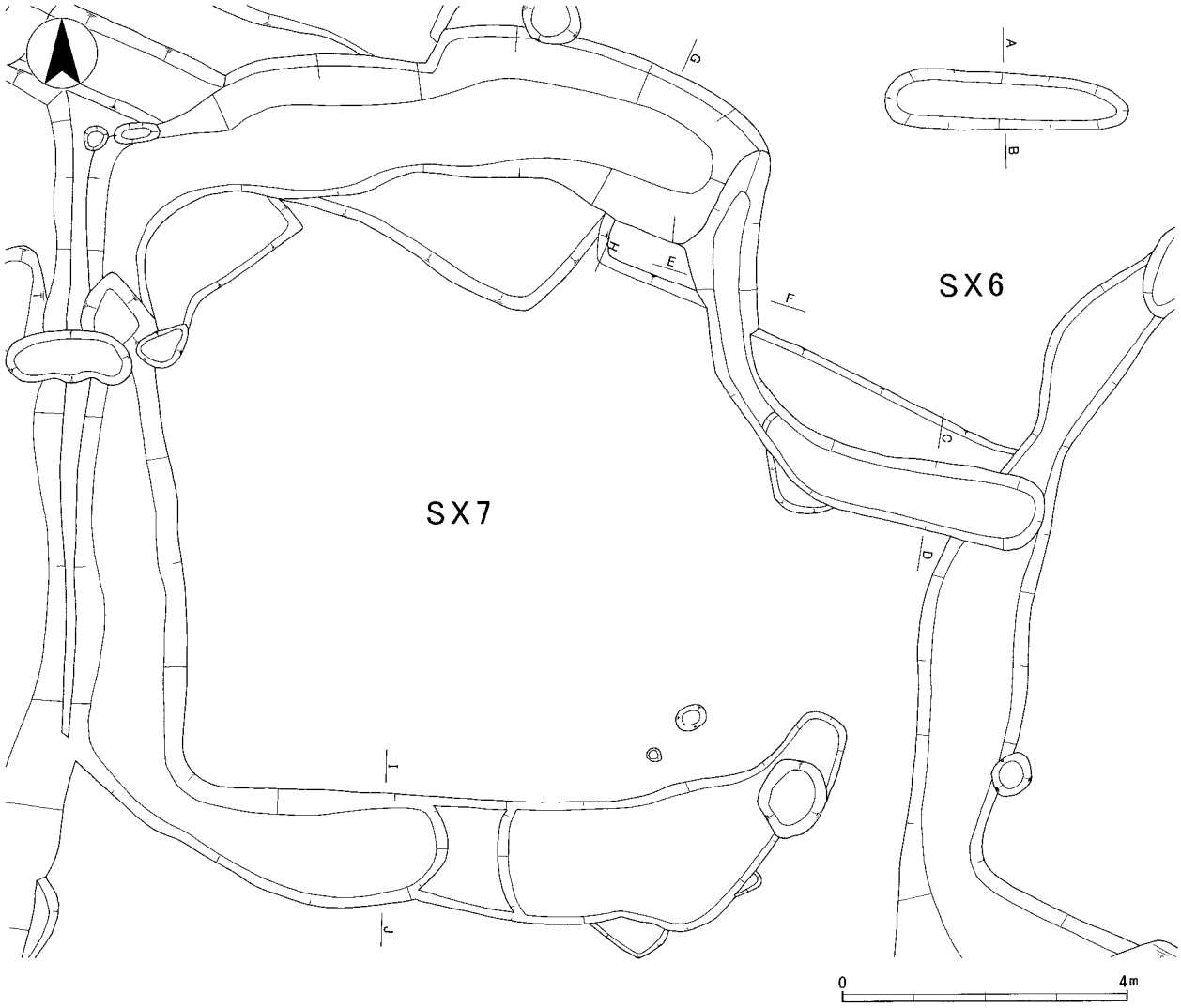


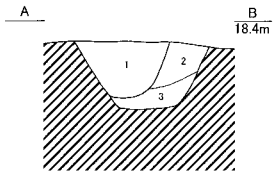
第８図　ＳＸ２・５平面図（1:100）、土層断面図・断面図（1:40）



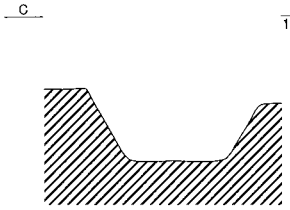


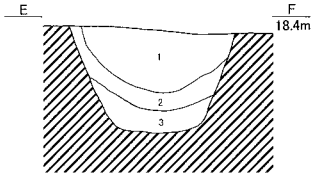
第９図　ＳＸ３平面図（1:100）、土層断面図・断面図（1:40）



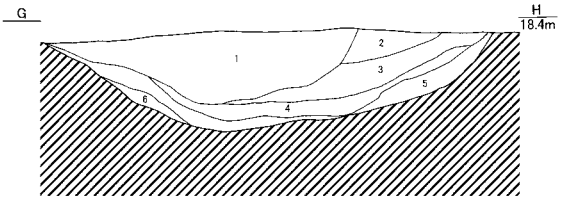


1　黒色土 7.5YR2/1　[撹乱]
2　黒褐色土 10YR3/2
3　黒褐色土 10YR3/1

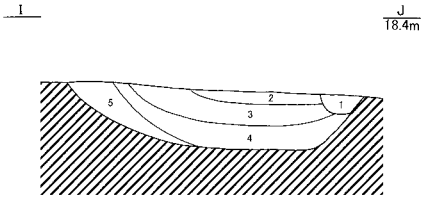




1　黒色土 10YR2/1
2　黒褐色土 10YR2/2
3　黒褐色土 7.5YR2/2
（褐色土 10YR4/4 混）



1　黒色土 7.5YR1.7/1
2　黒褐色土 7.5YR3/1
3　黒色土 7.5YR2/2
4　黒褐色土 7.5YR3/1（黒褐色土 10YR2/3 混）
5　暗褐色土 10YR3/4（褐色粘質土 10YR4/6 混）
6　黒褐色土 7.5YR3/2（褐色粘質土 7.5YR4/4 混）



1　灰黄褐色土 10YR4/2　[撹乱]
2　にぶい黄褐色土 10YR4/3
3　黒褐色土 5YR2/2
4　暗褐色土 10YR3/3
5　褐色土 7.5YR4/3

第10図　ＳＸ６・７平面図（1:100）、土層断面図・断面図（1:40）

５西周溝はＳＸ６築造時点で埋没がある程度進行していたことが分かる。しかし、ＳＸ５周溝からは土師器や須恵器が出土しており、ＳＸ６築造時点では完全なる埋没には至っていなかったはずである。ＳＸ６東側には新たな周溝が掘削されていないことからも、ＳＸ５西周溝は少なくとも視覚的に認識できるほどには残存しており、ＳＸ６の東周溝にＳＸ５西周溝を利用し、新たに周溝を掘削することを省略したと考えられる。この場合ＳＸ６は北西・北東コーナーに陸橋をもち、墳丘規模は東西約4.7m×南北5.0mとなる。

墳丘ライン、外周ラインともに西辺で外側へ膨らむが、北・南辺は直線的である。周溝南西コーナーは幅が狭くなっているが、深さはほぼ均一である。

出土遺物　南西周溝から土師器の小片が出土した。

ＳＸ７（第10図）

概要　調査区中央部西寄りで検出した。ＳＸ６の西側、ＳＸ９の東側、ＳＸ８の北側に位置する。墳丘規模は東西8.2～8.8m×南北8.7mである。西周溝とＳＸ９東周溝が重複しており、ＳＸ９より先に築造されたことが分かる。

周溝　東辺南寄りに設けられた陸橋を除き、北・西・南・東側を巡る。南周溝は東端で北側に鈍角に屈曲し、約1.0m延びて収束する。東周溝をＳＸ６と共有する。共有する周溝の土層断面には溝の重複は認められない。これは、東周溝に、もともとそこに存在したＳＸ６西周溝を利用し、新たな周溝を掘削することを省略した結果と考えられる。したがってＳＸ６より後に築造されたことになる[3]。

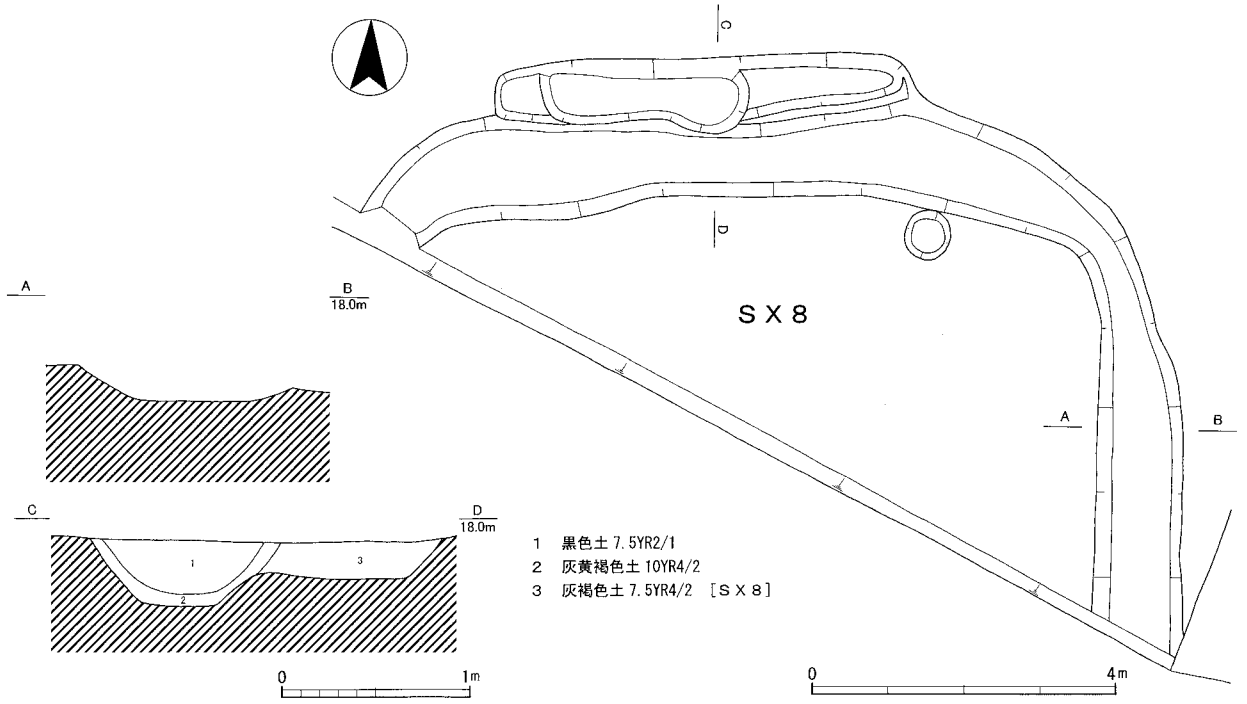
周溝の墳丘側ラインの北辺は後世の撹乱により判然としないが、西・南辺はおおむね直線的である。外周ラインは西辺がＳＸ９東周溝に破壊され判然としないが、北・南辺が外側へ膨らむ。その結果、周溝のコーナーが浅く幅が狭くなる傾向を示す。

周溝には黒色～黒褐色系土壌が数層埋積するが、下層には地山起因の褐色粘質土もしくは黒褐色土に褐色土ブロックが混じる層が確認された。南周溝では褐色土が墳丘側から流入している状況が確認でき、地山を掘削して墳丘を構築していたことが窺える。

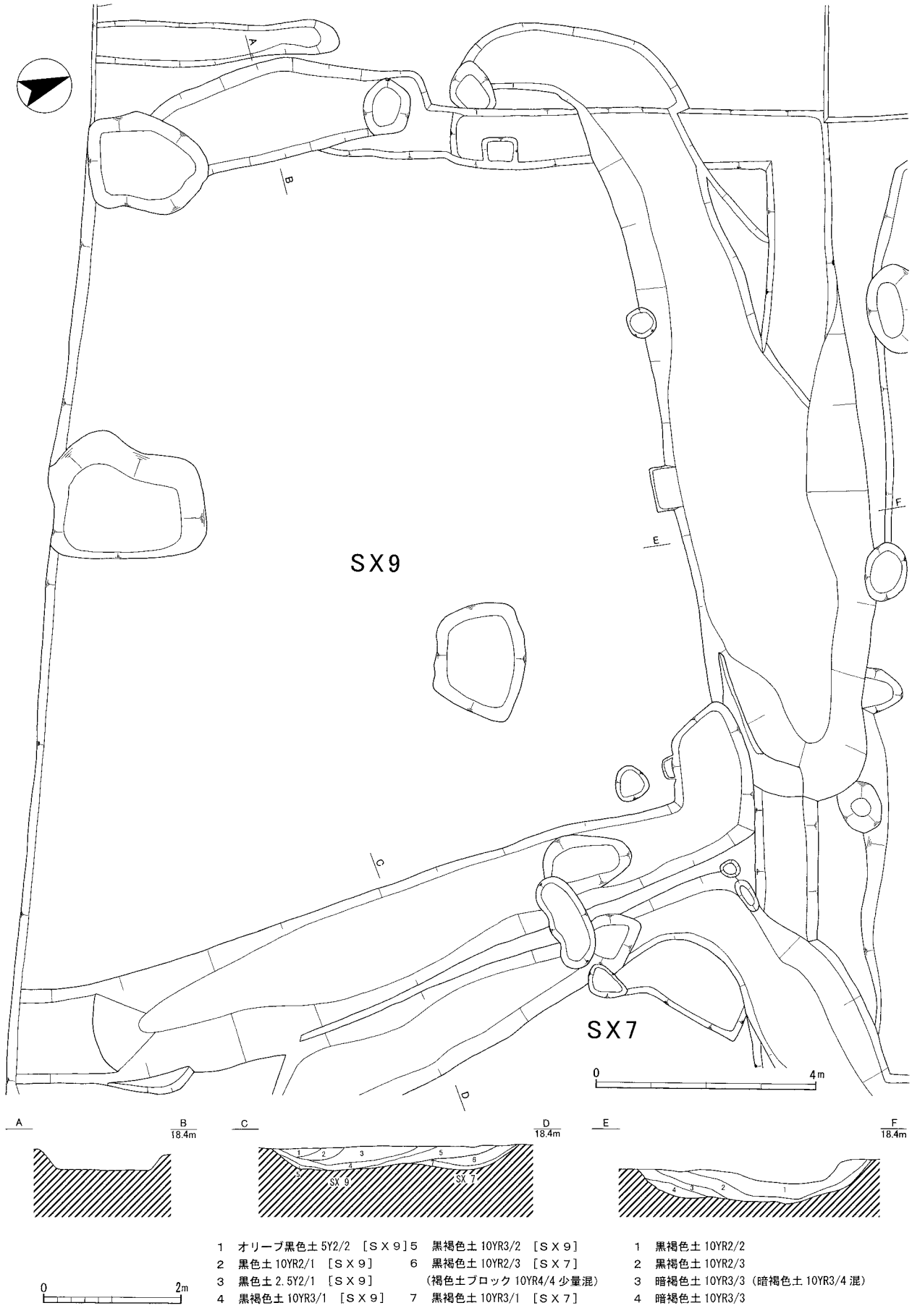
出土遺物　周溝から古代の土師器・須恵器が出土したが、図示するほどのものはなかった。

ＳＸ８（第11図）

概要　調査区中央部南端で検出した。ＳＸ７の南側に位置する。調査区の南側を走る道路に南西部を大きく削平されている。墳丘規模は東西約9.5m×南北5.5m以上である。



第11図　ＳＸ８平面図（1:100）、土層断面図・断面図（1:40）



第12図　ＳＸ９平面図（1:100）、土層断面図・断面図（1:80）

周溝　北・東周溝を検出した。北周溝は墳丘側・外周ラインとも外側へ膨らむが、東周溝は両側とも直線的である。コーナーの幅は狭いが特に浅くなる傾向は見られない。

出土遺物　北周溝から古代の土師器・須恵器が出土したが、図示するほどのものはなかった。

ＳＸ９（第12図）

概要　調査区西部で検出した。ＳＸ７の西側に位置する。南側は道路に削平されている。墳丘規模は東西13.6m×南北13.6m以上である。東周溝がＳＸ７西周溝と重複し、ＳＸ７より後に築造されたことが分かる。

周溝　北東コーナーと西周溝の一部が途切れるが、これは後世の撹乱の影響や、部分的に特に浅い所が削平され全くなくなってしまった結果と考えられる。したがって現存する範囲内には陸橋はなく、周溝は西・北・東側を途切れることなく巡ると考えられる。

周溝の墳丘側ラインはほぼ直線的であるが、外周ラインは外側へ膨らむ。

埋土には黒褐色土が数層埋積するが、北周溝では墳丘側から、東周溝ではＳＸ７側からの土砂の流入が窺える。

出土遺物　周溝から古代の土師器・須恵器が出土した。

＜溝＞

ＳＤ10（第13図）

調査区東部で検出した。幅約1.5m、深さ30cmほどのＬ字に屈曲する溝である。ＳＸ１西周溝及び陸橋西側周溝に重複し、ＳＸ１墳丘裾ラインに沿うように巡る。ＳＤ10はＳＸ１周溝埋土の上層とも考えられたが、ＳＸ１周溝埋土を明らかに切っており、また完形の須恵器台付長頸壺や土師器台付椀が一括して出土していることから別遺構と判断した。しかしＳＸ１墳丘裾を巡るため、墳丘はＳＤ10が掘削される時点でも遺存しており、何らかの関係をもっていたと考えられる。平面では確認できなかったが、ＳＸ１陸橋東側周溝の土層断面では墳丘側にＳＤ10と同様の灰黄褐色土層が確認できる。したがってＳＤ10は少なくともＳＸ１墳丘西～北裾を巡っていたと想定できる。その他にも、７世紀後半の須恵器・土師器が出土した。

ＳＤ13（第13図）

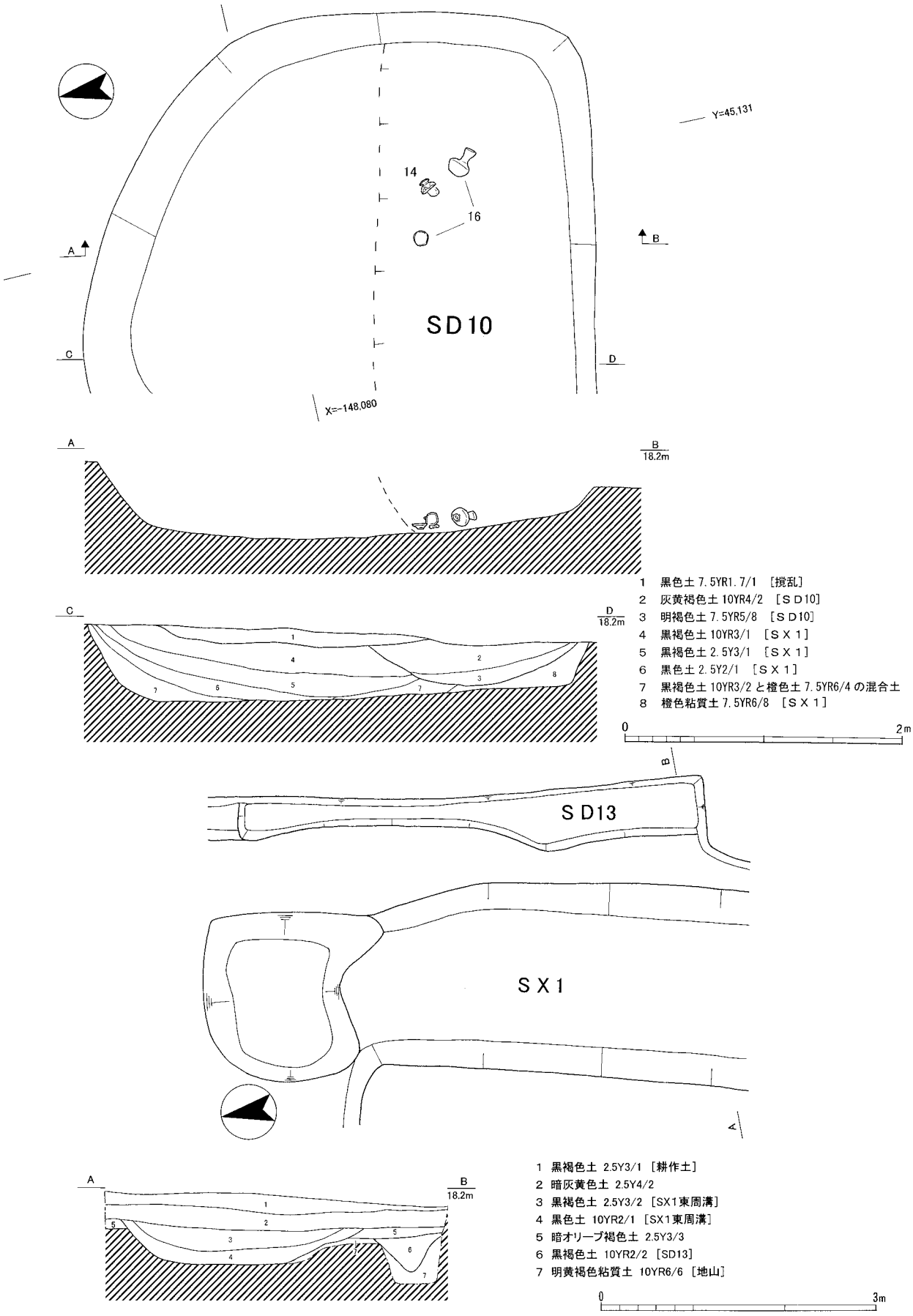
調査区東端で検出した。ＳＸ１東周溝と厚さ10cm程の層を挟んで重複関係にあり、ＳＸ１より前に掘削されたことが分かる。方形周溝墓の周溝の断面形状が逆台形もしくはU字形であるのに対し、ＳＤ13はＶ字形であるため、周溝とは違う用途で掘削されたものであったと推察される。遺物は出土しなかった。

〔註〕

① 現在多くの報告書で使用されている方形周溝墓の溝の「共有」は、現在では共有しているように見える状態すべてを包括して使われている表現である。これには、２基が本当に同時に造られ、間の溝を共有している場合、新しい方形周溝墓の溝が旧の方形周溝墓の溝をすべて包んで構築されることにより土層に新旧が現れない場合、旧の溝が埋まらないうちに新しい方形周溝墓が同一方向で接して構築されたため土層に切り合いが現れない場合、そして旧の方形周溝墓の溝の存在を前提とし、その位置の溝を省略して新しい方形周溝墓が造られる場合など、様々なパターンが想定できる。しかし方形周溝墓の切り合いの分類を行った伊藤敏行氏が言うように、墓としての性格上、共時的に２基を構築するとは考えにくく、現在では「共有」しているように見える状態でも、そこには新旧関係があると考えるのが妥当であろう。
伊藤敏行　「群構成論」『関東の方形周溝墓』同成社　1996

② ＳＸ４は陸橋脇の周溝が拡張されるという新しい形態的特徴を持つ一方、陸橋の位置は辺の中央ではなくコーナーの一つに設定されるという古い特徴も併せ持つ。こうした形態的特徴に見られる時期的な齟齬は、ＳＸ４を築造する際に何らかの制約があり、その結果として生じたものと考えられる。この場合の制約は、ＳＸ１である蓋然性が高く、よってＳＸ１の後にＳＸ４が築造されたと想定できる。そうした新旧関係を踏まえた上で現在での周溝の共有を考えると、ＳＸ４築造時に共有部分の周溝を掘削したと考えるには、ＳＸ４墳丘側ラインが現状で見られるように弓なりで、その結果ＳＸ４方台部が内側へ抉られていることに疑問を感じる。したがって、ＳＸ４東周溝にＳＸ１西周溝を利用し、新たな周溝を掘削することを省略したと想定するのが妥当であると考える。

③ ＳＸ７の周溝規模はＳＸ６と比べ明らかに大きい。もともと存在したＳＸ７東周溝をすべて包含してＳＸ６西周溝が掘削された、もしくはその逆と考えた場合、共有する溝の規模は小さく違和感がある。また、ＳＸ７陸橋両側の周溝は位置的に左右不対象で、何らかの制約がありその結果生じたものと考えられる。こうした制約がＳＸ６であったと考えるのがこの場合最も妥当であろう。



第13図　ＳＤ10遺物出土状況図・土層断面図（1:40）、ＳＤ13平面図・土層断面図（1:60）

番号	墳丘規模 東西(m) × 南北(m)	周溝規模(幅m、深さcm)								陸橋		主軸	重複関係	周溝が共有関係にあるもの	新旧関係
		東		西		南		北							
		幅	深さ	幅	深さ	幅	深さ	幅	深さ	位置	幅 (m)				
SX１	11.5×10.5	2.2	38	3.4	60	2.9	56	4.9	34	北	1.2	N15°E	SD10に切られる	SX４	SX１→SX４→SD10
SX２	7.5≦×—	—	—	—	—	—	—	1.5	26	—	—	N15°E			
SX３	8.2×7.7	1.0	38	2.0	32	1.2	22	1.0	41	なし	—	N23°E			
SX４	10.0×11.0	3.4	60	2.0	42	2.4	34	3.8	60	北東	1.3	N20°E		SX１	SX１→SX４
SX５	10.4×9.4	1.5	32	1.4	26	2.0	30	2.2	55	—	—	N20°E	SX６に切られる	SX６	SX５→SX６
SX６	4.7×5.0	1.2	11	0.7	54	1.0	35	0.8	35	北東 北西	1.7 1.7	NS0°	SX５を切る	SX５ SX７	SX５→SX６→SX７
SX７	8.2～8.8×8.7	0.7	54	1.5≦	34	1.6	30	2.2	52	南東	2.8	NS0°	SX９に切られる	SX６	SX６→SX７→SX９
SX８	9.5×5.5≦	1.1	19	—	—	—	—	1.3	20	—	—	NS0°			
SX９	13.6×13.6≦	3.3	32	1.8	33	—	—	3.9	56	—	—	N7°E	SX７を切る		SX７→SX９

第３表　遺構一覧表（方形周溝墓）

番号	グリッド	規模		新旧関係	時期	備考
		幅 (m)	深さ (cm)			
SD10	N～P18 N19	1.5	30	SX１→SD10	飛鳥	SX１墳丘北西裾をＬ字に巡る
SD11	O・P３・４	0.5	20		不明	
SD12	P・Q４	0.8	13		不明	
SD13	N・O22	0.7	15	SD13→SX１	弥生以前	

第４表　遺構一覧表（溝）

Ⅳ　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして約７箱である。時代別にみると縄文時代晩期後半（紀元前900～500年ごろ）[①]、古墳時代前期（４世紀）、飛鳥時代（７世紀）のものに大きく分けられる。量的に最も多いのは、飛鳥時代の遺物であり、その大部分が方形周溝墓の周溝埋土から出土したものである。

以下、遺構別に主なものについて概略を記述する。個々の詳細については、遺物観察表（第５表）を参照されたい。

ＳＸ１（１・２）　１は西周溝で出土した土師器甕である。２は陸橋東側周溝の墳丘寄りで出土した須恵器無蓋高杯である。杯部は口縁部が外反して立ち上がり、外面にやや鈍化した稜が一条、その直下に沈線が一条巡る。脚部の中ほどに退化した沈線が２条施される。

ＳＸ２（３～７）　全て北周溝から出土した。３は縄文晩期の凸帯文土器である。口縁部下の凸帯上には二枚貝によるＯ字状のキザミが施される。口縁端部は未調整である。伊勢湾西岸地域の縄文晩期末の土器編年を行った鈴木克彦氏によるⅢ期に比定できる[②]。４～７は中央部でまとまって出土した。４は土師器椀である。底部は平らで口縁部はやや内彎して立ち上がる。５・６は土師器甕、７は土師器長胴甕である。甕類はすべて外面に煤の付着や二次被熱による赤化など使用された痕跡を残す。７世紀後半の所産であろう。

ＳＸ３（８）　北周溝から出土した縄文土器底部である。

ＳＸ４（９）　陸橋西側の周溝から出土した須恵器無蓋高杯である。杯部は口縁部が直立気味に外反し、外面に２条の稜と一条の沈線が巡る。脚部は無スカシで中ほどに退化した沈線が２条施される。

ＳＸ５（10）　東周溝から出土した須恵器平瓶である。体部は扁平で丸みを帯びる。外面は体部下半を回転ヘラケズリ調整し、体部上半にはカキメが施され沈線が２条巡る。また体部上面にボタン状の粘土を貼付する。

ＳＸ９（11～13）　全て東周溝から出土した。11は土師器甕である。口縁部は体部に比べやや肥厚し上方に立ち上がる。７世紀の所産であろう。12は須恵器高杯の脚部である。上下２段２方向に長方形のスカシをもつ。13は須恵器甕である。口縁部断面形は長方形を呈し、肥厚した帯部の最下端に凸線が巡る。体部は外面を平行叩きした後カキメを施し、内面には同心円状の当て具痕が残る。

ＳＤ10（14～16）　全てＳＸ１陸橋西側の周溝と重複する部分で出土した。14は土師器台付椀である。脚台部と杯部の接合部外面にシボリ痕が明瞭に残る。15は須恵器短頸壺である。比較的肩の張った体部にやや外反する口縁部をもつ。底部が回転ヘラ切り未調整であるほかは回転ナデ調整される。16は須恵器台付長頸壺である。やや丸みを帯びる肩部に２条の沈線を巡らし間に刺突文を施す。脚台部は中ほどで屈曲して稜をなす。片側１/３ほどに焼成時に窯内で降り注いで溶着したと思われる白黄緑色の付着物が見られる。

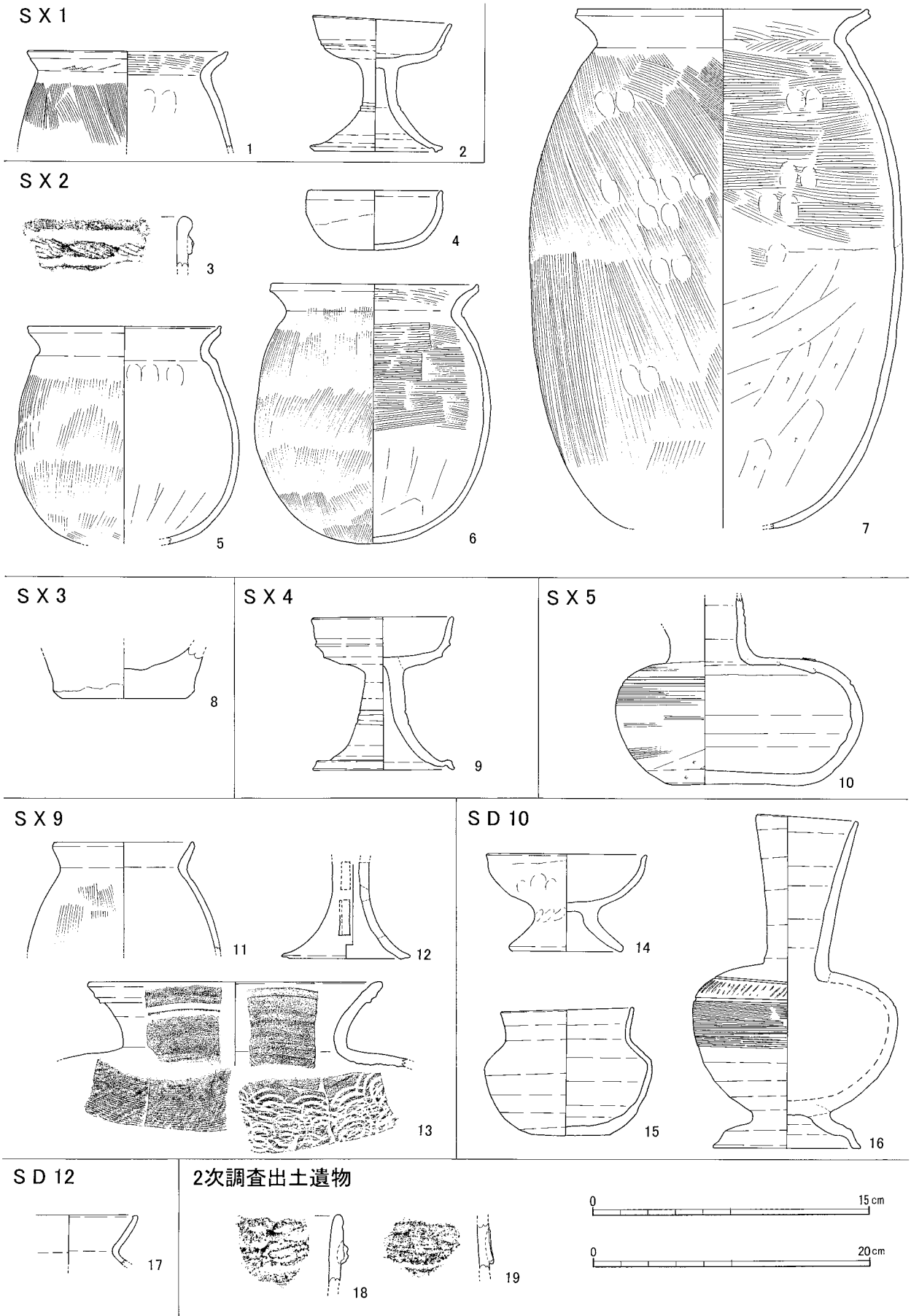
ＳＤ12（17）　布留型の土師器甕である。

２次調査出土遺物（18・19）　Ｂ10トレンチで出土した縄文晩期の凸帯文土器である。18は口縁部、19は口縁部もしくは肩部片である。18・19ともに凸帯貼り付け後、二枚貝によるＯ字状のキザミが施される。鈴木氏編年のⅢ期に比定できる。

〔註〕

① 山本直人　「東海・北陸における弥生時代の開始年代」『縄文時代から弥生時代へ』　雄山閣　2007で示された年代を参考にした。

② 鈴木克彦　「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相―伊勢地方からの視点―」『三重県史研究』弟６号　三重県　1990



第14図　出土遺物実測図（３・８・18・19は1:3、その他1:4）

報告番号	実測番号	器種	遺構出土位置		計測値(残存値)	調　整	胎土	焼成	色調	残存	特記事項
			グリッド	遺構･層位	口径 器高 底径						
1	007-02	土師器 甕	O18	ＳＸ１ 西周溝	14.4 (7.0) —	外:体部ハケメ(８本/cm)→口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコハケ、体部ナデ	密	良	橙 7.5YR7/6	口縁部 9/12	
2	003-02	須恵器 無蓋高杯	N20	ＳＸ１ 北周溝東	10.0 9.6 脚底径8.8	内外:回転ナデ	密	良	灰黄 2.5Y5/1	9/12	
3	006-01	縄文土器	S19	ＳＸ２	—	外:凸帯貼り付け後二枚貝によるO字キザミ 内:ナデ	粗	良	橙 7.5YR7/6	口縁部小片	
4	006-02	土師器 椀	S19	ＳＸ２	9.7 4.3 —	内外:ナデ後口縁部ヨコナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/4	9/12	
5	004-01	土師器 甕	S19	ＳＸ２	13.8 (15.7) —	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ(６本/cm) 内:口縁部ヨコナデ、体部オサエ･ナデ、底部ヘラケズリ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	9/12	外面煤付着
6	004-03	土師器 甕	S19	ＳＸ２	14.9 18.8 —	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ(８本/cm) 内:口縁端部ヨコナデ、口縁～体上部ハケメ(８本/cm)、体下部～底部ヘラケズリ	密	良	にぶい橙 7.5Ｙ R6/4	7/12	外面煤付着
7	005-01	土師器 長胴甕	S19	ＳＸ２	20.8 (37.5) —	外:口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ後ハケメ(６本/cm) 内:口縁部ヨコナデ、体上部ユビオサエ後ハケメ(６本/cm)、体下部ヘラケズリ	密	良	灰白 2.5Y8/2	7/12	外面煤付着
8	006-03	縄文土器	Q16	ＳＸ３	— — 底径6.8	外:ナデ･オサエ 内:ナデ	粗	良	にぶい黄橙 10YR7/3	底部 6/12	
9	003-03	須恵器 無蓋高杯	M17	ＳＸ４	10.0 11.0 脚底径10.2	内外:回転ナデ	密	良	灰 5Y6/1	7/12	
10	004-02	須恵器 平瓶	R15	ＳＸ５	— (13.5) 底径9.7	外:頸部回転ナデ、体部上半カキメ、体部下半回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り未調整 内:回転ナデ	密	良	灰黄 2.5Y5/1	11/12	体部上面にボタン状の粘土貼り付け 肩部外面自然釉付着
11	006-05	土師器 甕	R８	ＳＸ９ 東周溝	10.0 (7.9) —	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケメ(７本/cm) 内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	浅黄橙 10YR8/3	1/12	
12	006-04	須恵器 高杯	R８	ＳＸ９ 東周溝	— (7.0) 底径8.0	内外:回転ナデ	密	良	灰 5Y5/1	脚部 7/12	２段２方向スカシ
13	007-01	須恵器 甕	P９	ＳＸ９ 東周溝	21.2 (6.6) —	外:口縁部回転ナデ、肩部平行タタキ後カキメ 内:口縁部回転ナデ、肩部同心円当て具痕	密	良	灰褐 7.5YR6/2	口縁部 7/12	
14	003-04	土師器 台付椀	N19	ＳＤ10	11.4 7.0 脚台底径10.0	外:杯部オサエ･ナデ後口縁部ヨコナデ、脚台部ヨコナデ 内:杯部ナデ後口縁部ヨコナデ、脚台部ヨコナデ	密	良	橙 7.5YR6/6	10/12	調査時出土遺構番号 ＳＸ１北周溝
15	003-01	須恵器 短頸壺	N19	ＳＤ10	9.7 9.7 —	外:回転ナデ、底部回転ヘラ切り未調整 内:回転ナデ	密	良	灰 10Y6/1	11/12	調査時出土遺構番号 ＳＸ１北周溝
16	002-01	須恵器 台付長頸壺	N19	ＳＤ10	7.3 24.0 脚台底径10.6	外:頸部回転ナデ、体上部カキメ、体下部回転ケズリ、脚台部回転ナデ 内:回転ナデ	密	良	オリーブ黒 10Y3/1	ほぼ完形	外面自然釉付着 調査時出土遺構番号 ＳＸ１北周溝
17	007-03	土師器 甕	P５	ＳＤ12	—	外:口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコナデ、体部オサエ･ナデ	密	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部小片	
18	001-01	縄文土器		２次調査 B10トレンチ ４層	—	外:凸帯貼り付け後二枚貝によるO字キザミ 内:ナデ	粗 ～4㎜ 内砂粒 含む	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部小片	
19	001-02	縄文土器		２次調査 B10トレンチ ８層	—	外:凸帯貼り付け後二枚貝によるO字キザミ 内:ナデ	やや密 ～3㎜ 内砂粒 含む	良	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部小片か？	

第５表　遺物観察表

Ⅴ　まとめ

1　方形周溝墓について

向山遺跡では９基の方形周溝墓が検出された。墓域は確実に南へ広がり、東西へも広がっていた可能性が考えられる。先述のように、本遺跡の周溝墓群からは供献土器などの遺構に伴う遺物が一切出土していない。そこで、ここでは周溝の重複や共有の状況と主軸方向などから考えられる造墓の変遷と、周溝墓の形態から類推される時期を考慮し、方形周溝墓群の築造時期について検討を行う。また、その他調査成果から提起される問題について、若干の考察を加えてみたい。

（1）造墓の変遷と時期

〈平面形態〉

本遺跡の方形周溝墓の形態は、陸橋の有無とその位置に着目すると以下の４つに分類される。

A形態　周溝が途切れず全周するもの。周溝の全容を窺えないもののうち、ＳＸ３・５・９は北・東周溝のほぼ全てが検出されており、この部分に陸橋が存在しないことが分かっている。本遺跡では陸橋を持つものは全て北もしくは東側に設置されており、これらの周溝墓の南・西側に陸橋が存在した可能性は低い。したがって、ＳＸ３・５・９の周溝は全周し、この形態に該当すると考えられる。

B形態　一辺の両端２ヶ所に陸橋を持つもの。ＳＸ６が該当する。

C形態　一辺の中央付近１ヶ所に陸橋を持つもの。ＳＸ７は東辺南寄り１ヶ所に陸橋を持ち、この形態に該当する。

D形態　一辺の中央付近１ヶ所に陸橋を持ち、その部分が拡張された形態のもの。ＳＸ１・４は北側に位置する陸橋が大きく拡張されており、この形態に該当する。

〈グループ〉

本遺跡の方形周溝墓群は、隣り合う周溝墓がほぼ近似した方向で周溝が接したり、周溝の一部が重複したりして展開しており、全体で一つの単位として把握することができる。しかし、調査区内での平面的位置・形態・規模・周溝の共有・主軸方向を考慮すると、１～３基からなる以下の４つのグループに分けることができる。

第１グループ　調査区北東に造営されたＳＸ１・４からなる。主軸方向がＮ15°Ｅ～Ｎ20°Ｅの範囲にあり、規模が11m以上の比較的大型のものである。平面形態はＤ形態である。新旧関係はＳＸ１→ＳＸ４である。

第２グループ　調査区南東に造営されたＳＸ２・３・５からなる。主軸方向はＮ15°Ｅ～Ｎ23°Ｅの範囲にあり、規模は10ｍを大幅に超えない。平面形態はＡ形態である。

第３グループ　調査区南側中央に造営されたＳＸ６～８からなる。主軸方向が座標北にあり、規模は９ｍ前後のものと５ｍ前後の二者がある。平面形態にはＢ形態とＣ形態があり、新旧関係はＳＸ６→ＳＸ７である。

第４グループ　ＳＸ９のみであるが、主軸方向Ｎ７°Ｅで規模が13m以上と大型であり、別グループとした。平面形態はＡ形態である。

〈造墓の変遷〉（第15図）

ＳＸ５とＳＸ６、ＳＸ７とＳＸ９の間に周溝の重複がみられることから、少なくとも第２～４グループ間には時間差があり、第２グループ→第３グループ→第４グループという東から西への造墓の過程が読み取れる。しかしＳＸ５とＳＸ６には周溝の共有関係があり、ＳＸ７とＳＸ９は近似した方向での一部の重複ということから、その時間差はそれほど大きくないことが推測される。また、第１グループは他の方形周溝墓と周溝の重複や共有関係を持たないが、周溝墓の主軸方向が第２グループと一致するため、第２グループとほぼ同時期に造営されたと言えるのではないだろうか。

したがって本遺跡では第１・２グループが最初に造営され、その後第２グループの西側へ第３、第４グループと継起的に方形周溝墓が築造されたと言える。

〈造墓の時期〉（第６表）

本遺跡で採用された４つの形態について、中南勢地域のもので、出土遺物により時期が判明しているものについて集成を行った。以下ではそれらの方形周溝墓との比較において本遺跡の方形周溝墓の築造時期を検討する[1]。

Ａ形態は弥生時代終末から古墳時代初頭に出現する。溝の巡り方のみを問題にすれば、古墳時代を通して採用された形態である。Ｂ形態は類例が少ないが、弥生時代中期後葉から後期にかけて見られる。Ｃ形態は弥生時代後期に出現し、弥生時代終末から古墳時代初頭に盛行する。Ｄ形態は、中南勢地域ではこれまで２例しか確認されていない。しかし、この形態の前段階であるＣ形態が弥生時代終末から古墳時代初頭に盛行し、発展した形態と捉えられている大足１号墳のような前方後方形周溝墓が古墳時代前期前半に築造されていることからも、弥生時代終末から古墳時代初頭の限られた時期に採用された形態と考えてよいであろう。

本遺跡の方形周溝墓のうち、最初に築造された第１・２グループは、それぞれＤ・Ａ形態である。このうちＤ形態は弥生時代終末から古墳時代初頭の限られた時期に存在し、Ａ形態はこの時期に出現する形態であるから、本遺跡の方形周溝墓群は弥生時代終末～古墳時代初頭以降に築造が開始されたと考えてよいであろう。その後築造された第３グループのＢ形態はこの時期にはすでに見られなくなる形態ではあるが、本遺跡のＢ形態であるＳＸ６は先に築造されたＳＸ５に制約を受けており、特殊な事例であると言える。また、同じ第３グループで採用されたＣ形態は弥生時代終末から古墳時代初頭に盛行する形態であることからも、第３グループの築造もこの時期と考えたい。本遺跡で最後に築造された第４グループのＳＸ９はＡ形態に分類されるが、この形態のものは周溝の巡り方のみでいえば古墳時代を通じて採用される形態である。しかしＳＸ９と第３グループとの間には大きな時間差を想定できず、古墳時代初頭を大きく下らない時期に築造されたと推測できる。したがって本遺跡の方形周溝墓群はおおよそ弥生時代終末から古墳時代前期前半に築造されたと考えられる。

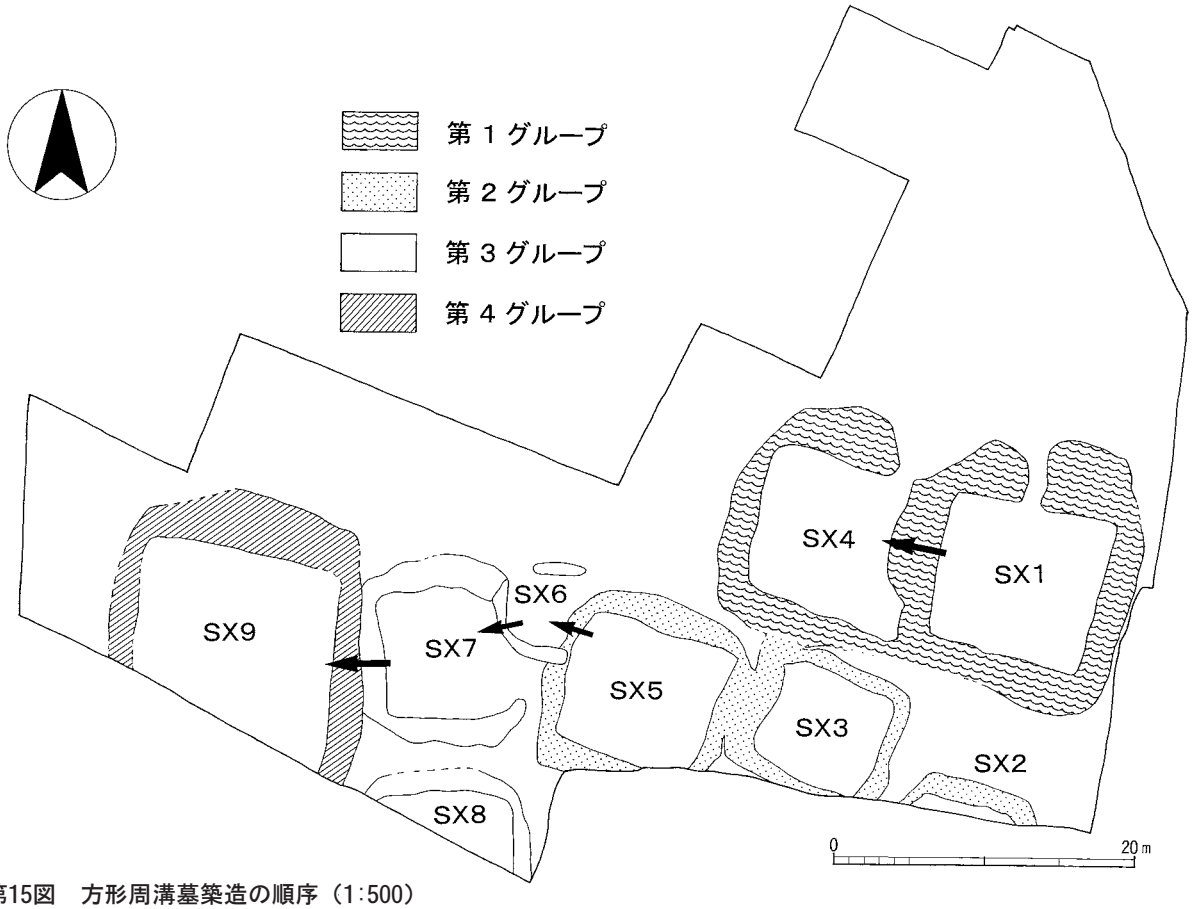
（２）向山遺跡の方形周溝墓に見る儀礼の痕跡

ＳＸ４陸橋西側の周溝からは焼土が検出された。土層断面は、焼土が周溝外周から流れ込んだ状況を示している。今回の調査では方形周溝墓や用途不明の溝以外に遺構は検出されていない。したがって、この焼土が他の遺構に伴う二次的な堆積である可能性は低い。

県内では瀬干遺跡のＳＸ９北西コーナーで焼土・炭が集石に伴って検出されている[2]。集石は周溝がある程度埋まった段階で、周溝の外周寄りに人為的に置かれている。集石自体に被熱した痕跡は認められていない。集石の性格は不明であるが、焼土・炭化物には流れ込みの様相は認められず、廃棄されたものと考えられる。ＳＸ９は全体が検出されていないが、同遺跡の他の方形周溝墓はすべてＣ形態もしくはＤ形態で、出土遺物の時期もそれらと同時期であることから、ＣもしくはＤ形態であると考えられる。

県内の方形周溝墓における焼土の検出例は以上二例にとどまるが、関東では方形周溝墓検出の焼土・炭の事例が多く報告されている[3]。それによると、時期的には弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての例が圧倒的比率を占め、周溝の平面形態ではＡ形態とＣ形態が多い。検出状況で大多数を占めるのが周溝のコーナーや陸橋部の上層・中層で検出されるものであり、その中には廃棄されたものと、流れ込んだものの両者が存在する、という傾向がみられるという。そしてこれらの焼土・炭化物は、方形周溝墓築造後一定期間を経た後に、墳丘もしくは周溝外で行われた火を用いた儀礼の間接的痕跡であると理解されている。

向山遺跡ＳＸ４は弥生時代終末から古墳時代初頭のＤ形態、瀬干遺跡ＳＸ９は弥生時代終末から古墳時代初頭のＣ形態もしくはＤ形態であり、検出の状況も関東の事例と類似するところが多く見られる。今後類例の増加を待ってさらに詳細な検討が必要であるが、県内の方形周溝墓で見られる焼土も、関東の事例同様火を用いた葬送儀礼の存在を示している可能性があることを指摘しておきたい。　（才木）



第15図　方形周溝墓築造の順序（1:500）

形態	弥生時代中期後葉	弥生時代後期	弥生時代終末～古墳時代初頭	古墳時代前期前半
A形態			雲出島貫SX364[5]	前田町屋1～4号墳[13]
B形態	寺垣内SX201[1]	北野(5次)SX5[2]		
C形態		位田SX6・8[3] 下之庄東方(前山地区) SX1～3・5・6[4] 寺垣内SX9・103・202・208[1]	雲出島貫SX387・A1号墓[5] 草山SX3・5・114・115・180・181[6] 瀬干SX8[7] 北野(2次)SX2222[8] 織糸SX7・8[9] 城堀SX63・68[10] 寺垣内SX204[1] 野垣内SX14・19・23[11]	
D形態			瀬干SX2[7] 上ノ垣内SX3[12]	
前方後方形周溝墓				大足1号墳[14]

*[ ]内の数字は註①の参考文献番号

第６表　方形周溝墓の形態と築造時期

2　集落と墓域について

今回の調査区では、竪穴住居・掘立柱建物は検出されなかった。そこで、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした竪穴住居・掘立柱建物を検出した第１次調査もふまえて、向山遺跡の集落と墓域の位置関係について簡単に触れてみたい[4]。

（1）第１次調査のＳＤ１

第１次調査では、方形周溝墓の可能性を示唆する溝（ＳＤ１）が検出されている。このＳＤ１は最大幅2.1m、深さ40㎝、段丘縁辺部に位置することなど、今回調査した方形周溝墓と様相が類似している（第３表参照）。またＳＤ１は、出土遺物より弥生時代後期とされている。これらのことより、ＳＤ１は方形周溝墓と判断してよいのではないだろうか。

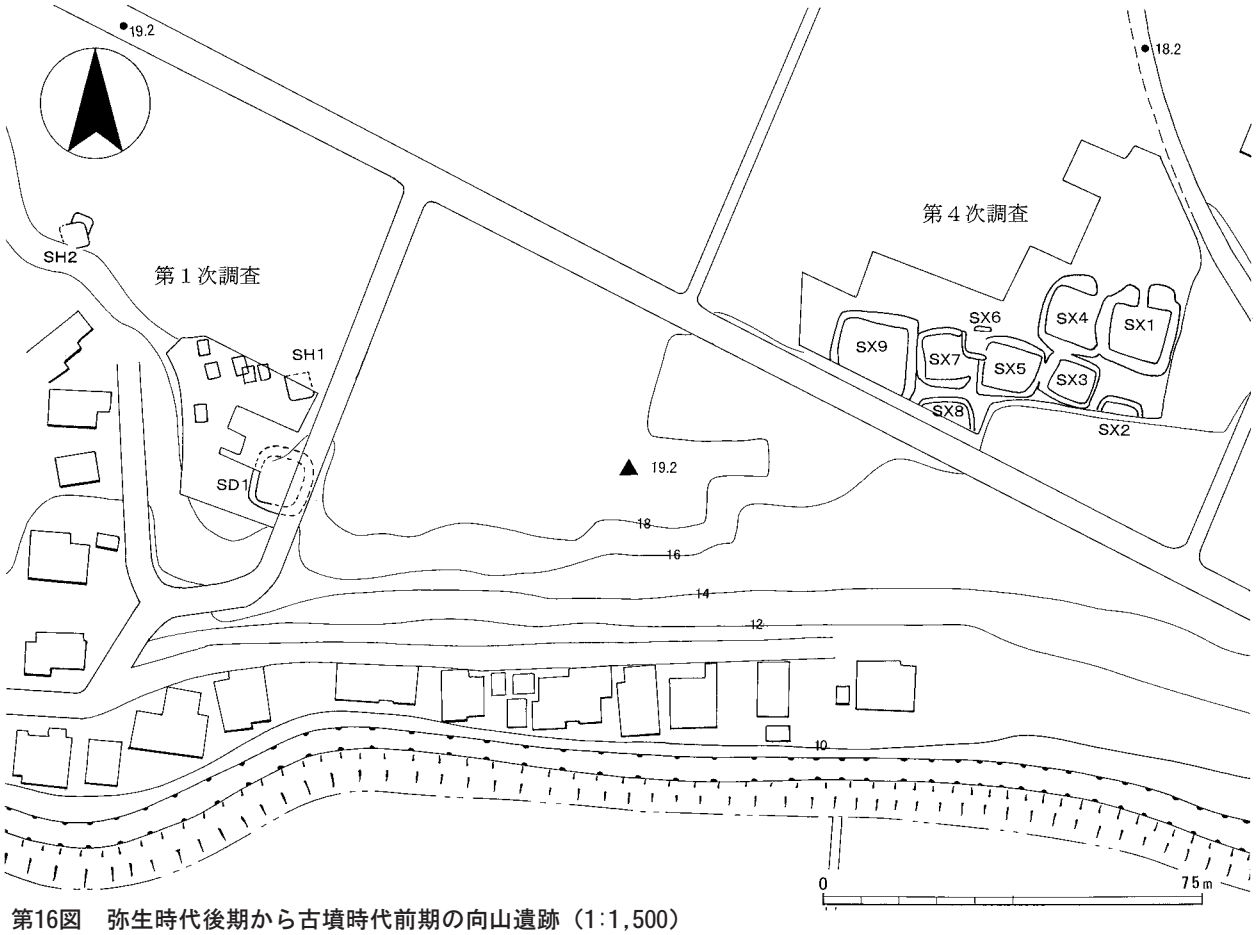
（2）弥生時代後期から古墳時代前期の集落と墓域の位置関係

地形的に見ると、向山遺跡西側には小森山古墳群との境界間に南北に連なる形の入り組んだ谷がある。東側にも龍ヶ谷があり、南側は段丘で区切られている。その他範囲確認調査の結果を参考にすると、今回の調査区より南北側では、遺構・遺物ともに確認できなかった（第１図参照）。また、第１次調査より西約100m、小森山古墳群北東約100ｍの地点での範囲確認調査においても、遺構・遺物は確認できなかった[5]。

また、第１次調査では、弥生時代後期後半1棟（ＳＨ１）、古墳時代前期1棟（ＳＨ２）の竪穴住居、弥生時代後期と想定される掘立柱建物６棟が検出されている。これらの建物跡が検出されたのは、標高18ｍを越える平坦地である。また、ＳＤ１（第１次調査）とＳＸ１～ＳＸ９（第４次調査）、合計10基の方形周溝墓は、段丘縁辺部の標高16m～18m間で検出されている（第16図）。

これらの位置関係より、弥生時代後期から古墳時代前期の集落は、第１次調査区の北側から第４次調査区外の西側に位置していたことが想定される。また、段丘縁辺部沿いに広く造墓がなされていたことも想定される。

つまり、台地上の平地に集落、縁辺部に墓域が位置していたことになる。　　（前野）



第16図　弥生時代後期から古墳時代前期の向山遺跡（1:1,500）

3　方形周溝墓廃絶後の向山遺跡

今回の調査では弥生時代終末から古墳時代前期前半と考えられる方形周溝墓が検出される一方で、出土遺物には当該期のものはなく、周溝墓からは７世紀の土器が多く確認された。そうした中で唯一、ＳＤ10がＳＸ１墳丘北西裾を巡る７世紀の溝であることが確認されている。ＳＸ１墳丘は、ＳＤ10が掘削される時まである程度の高まりとして残存しており、ＳＤ10はＳＸ１墳丘と何らかの関係をもって掘削されたと考えられた。ＳＤ10と重複するＳＸ１北西周溝で出土した７世紀代の土器は、本来ＳＤ10に伴うものであった可能性が高い。それらを含めＳＤ10出土の土器を見てみると、須恵器には台付長頸壺・短頸壺・高杯、図示していない瓶類があり、供献用として同時期の群集墳から出土する器種がその大半を占めている⑥。土師器には台付椀や甕が存在するが、須恵器に比べごく少量の出土である。以上から導き出されるＳＤ10の性格として、ＳＸ１墳丘を利用して築造された７世紀の古墳の周溝が、一つの可能性として挙げられるのではないだろうか。

その他の周溝墓の出土遺物にも、供献用土器が多く含まれている。しかし、これらが出土した周溝には、ＳＤ10に見られるような新たな掘り込みはなく、また土器が意図的に置かれたような形跡もない。これまでの向山遺跡の調査では、当該期の遺構・遺物はＳＤ10以外全く検出されていないが、高茶屋台地の縁辺部には四ツ野・小森山・牧古墳群⑦などの後期古墳が数多く造営され、当該期の墓域としては良好な立地条件であったことが想像される。近年の調査では、台地下の木造赤坂遺跡で、向山遺跡出土の土器と同時期の飛鳥・奈良時代の集落が確認されている⑧。ＳＤ10が古墳である可能性、出土遺物における供献土器の数的優位、立地条件、台地下の同時期の集落の存在は、耕作活動などによる地形改変によって現在では消滅してしまった古墳が、周辺に存在した可能性を示しているのではないだろうか。想像の域を超えない議論であるが、周溝墓から出土した７世紀の土器の帰属を考える上での一つの可能性として示唆しておきたい。　　（才木）

〔註〕

① 時期区分については、上村氏の第Ⅳ様式を弥生時代中期後葉、第Ⅴ様式を弥生時代後期、第Ⅵ様式を弥生時代終末～古墳時代初頭とし、赤塚氏の廻間Ⅱ～Ⅲ式を古墳時代前期前半とした。
上村安生　「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社　2002
上村安生　「弥生土器編年概観」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005
赤塚次郎　「廻間式土器」『廻間遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター　1990
第６表の遺跡については以下の文献を参考にした。
[1]泉　雄二　「Ⅵ周辺関連遺跡　１寺垣内遺跡」『織糸遺跡』　三重県埋蔵文化財センター　2006
[2]三重県埋蔵文化財センター　『北野遺跡（５次）発掘調査概要報告』　1996
[3]三重県埋蔵文化財センター　『位田遺跡発掘調査報告』　1999
[4]和氣清章　「第二章　弥生時代 第二節　主な遺跡　三中川地区　下之庄東方遺跡」『嬉野史　考古編』　松阪市　2006
[5]本書　第Ⅱ章２　註③参照
[6]松阪市教育委員会　『草山遺跡発掘調査月報１～10』　1988～1991
[7]宇河雅之　「Ⅱ．瀬干遺跡」『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・大蓮寺遺跡・柳辻遺跡・北垣内遺跡』　三重県埋蔵文化財センター　1996
三重県埋蔵文化財センター　『瀬干遺跡（第２次）発掘調査報告』　2000
[8]三重県埋蔵文化財センター　『北野遺跡（２・３・４次）発掘調査報告』　1995
[9]三重県埋蔵文化財センター　『織糸遺跡』　2006
[10]三重県埋蔵文化財センター　『城堀遺跡発掘調査報告』　2003
[11]下村登良男　「伊勢市上地町　野垣内遺跡」『昭和48年度県営圃場整備事業地域　埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会他　1979
[12]三重県埋蔵文化財センター　『上ノ垣内遺跡』　1996
[13]三重県埋蔵文化財センター　『前田町屋遺跡（第１次）発掘調査報告』1997、同『前田町屋遺跡　第2次調査』　1999
[14]小林　秀「７．大足遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター　1990

② 前掲註①[7]に同じ

③ 福田聖　「方形周溝墓と火」『戸田市史研究』第９号　戸田市立郷土博物館　1993

④ 津市教育委員会　『向山遺跡発掘調査報告』　2003
第１次調査では、掘立柱建物10棟、柵４列、竪穴住居２棟、溝１条、土坑４基が検出された。掘立柱建物と柵は出土遺物が少量のため、建物方位により遺構の変遷が示されている。しかし、時期の新旧関係が不明な点も示唆されている。ここでは、出土遺物が確認されている竪穴住居２棟を中心に述べることにするが、詳細については上記の報告書を参照されたい。なお、文章で使用されている竪穴住居ＳＨ１・ＳＨ２・溝ＳＤ１（方形周溝墓）は、第１次調査で検出された遺構である。

⑤ 津市埋蔵文化財センター　『津市埋蔵文化財センター年報』５　2001

⑥ たとえば６世紀後半から７世紀後半に造営された河田古墳群の副葬品の内訳から、土器組成における須恵器の数的優位が明確に読み取れる。多気町教育委員会　『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』　1986

⑦ 本書　第Ⅱ章１　註②参照

⑧ 本書　第Ⅱ章２　註②参照

写 真 図 版

調査区全景（南から）

調査区東側（北西から）

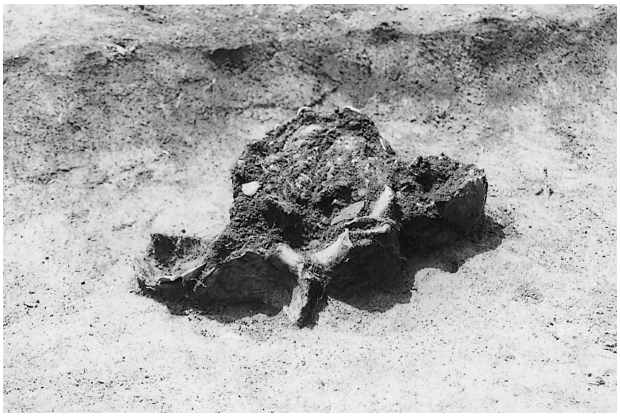
図版２

ＳＸ１（北から）

ＳＸ１北辺東側周溝断面（東から）

ＳＸ１北辺西側周溝・ＳＤ10断面（東から）

ＳＤ10遺物出土状況（北から）



ＳＸ２遺物出土状況（北東から）

ＳＸ１・４（北から）

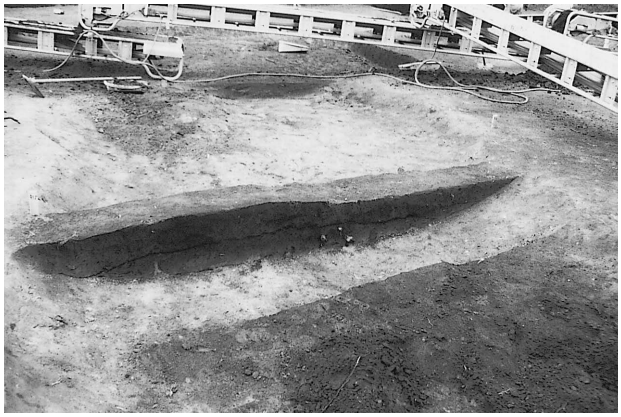
ＳＸ２（北から）

図版４

ＳＸ２・３・５（西から）

ＳＸ３北周溝・ＳＸ４南周溝断面（東から）

ＳＸ３北周溝断面（東から）



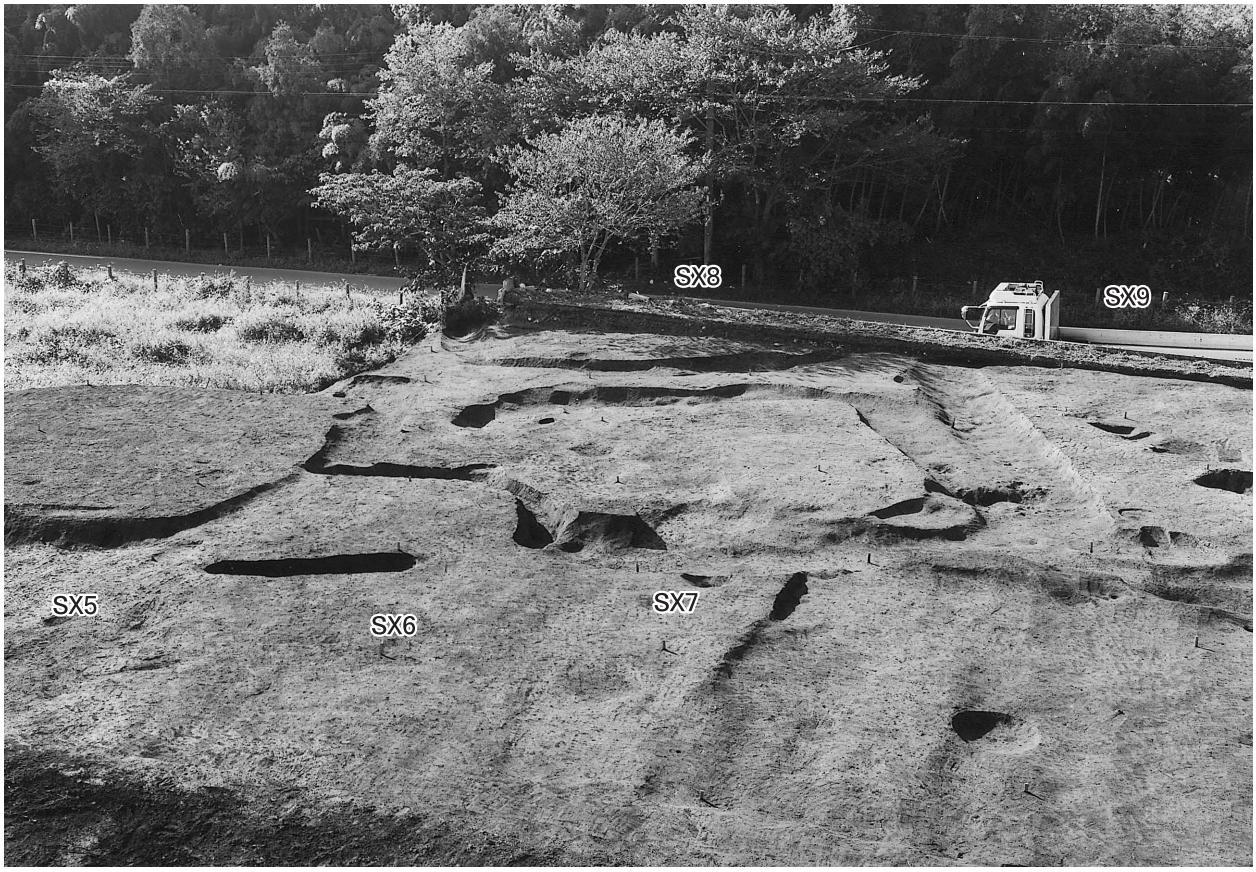
ＳＸ３西周溝・ＳＸ５東周溝断面（南から）

ＳＸ５遺物出土状況（北東から）

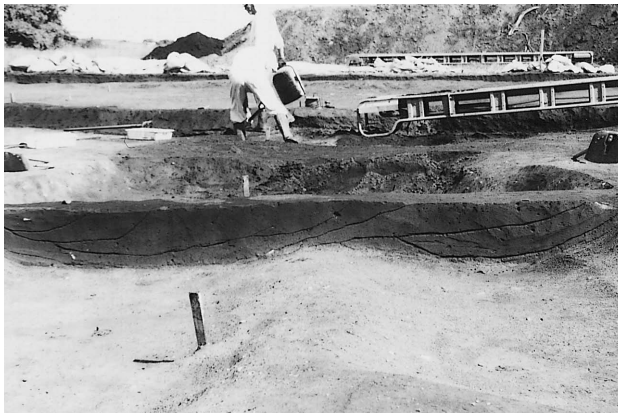
ＳＸ８（北から）

ＳＸ９（北から）

図版６



調査区西側（北から）



ＳＸ７西周溝・ＳＸ９東周溝断面（南から）

ＳＸ８北周溝断面（西から）

現地説明会の様子

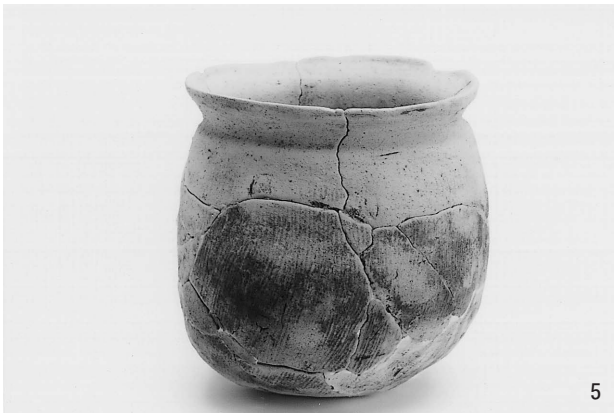
調査後の工事の様子

1

2

3

4


5

6

7

9

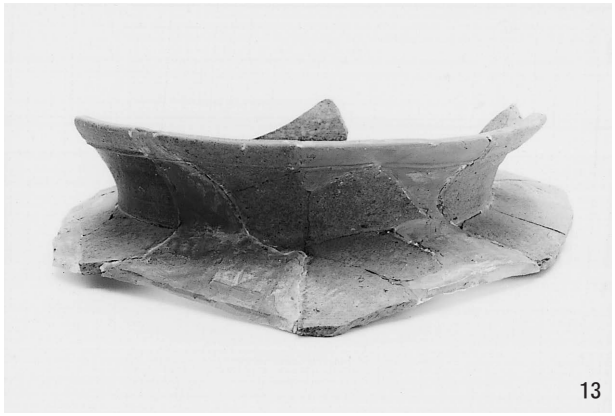
出土遺物①

図版８

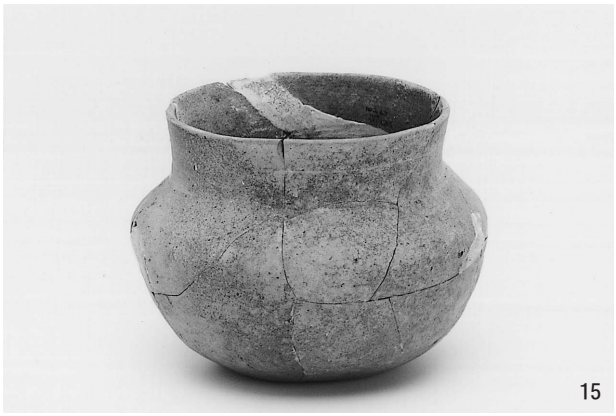
10

11

12


13

14


15

16

17

出土遺物②

報 告 書 抄 録

ふりがな	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ（じゅうさんこうく）けんせつじぎょうにともなう むかいやまいせき（だいよじ）はっくつちょうさほうこく
書名	一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う 向山遺跡（第４次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	115-28
編著者名	角正芳浩　前野謙一　才木薫
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５-０３２５　三重県多気郡明和町竹川５０３　　℡０５９６－５２－１７３２
発行年月日	西暦２００９年　２月　２７日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
むかいやまいせき 向山遺跡	つしたかちゃや 津市高茶屋 こもりちょう 小森町	201	a797	34° 39′ 36″	136° 29′ 36″	20070806～ 20071129	2,393	一般国道23号 中勢道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向山遺跡	集落跡	縄文時代晩期		凸帯文土器	
		弥生時代終末～古墳時代前期前半	方形周溝墓９基		
		飛鳥時代	溝	須恵器・土師器	

要約

雲出川左岸の段丘縁辺部に位置する。弥生時代終末から古墳時代前期前半と想定される方形周溝墓を９基確認した。墳丘部はすでに削平されており、周溝のみが検出された。方形周溝墓は密集し、その周溝は共有あるいは、重複する。周溝は辺の中央や隅で途切れているものが多い。周溝からは、縄文土器や飛鳥時代の土師器・須恵器が出土したが、方形周溝墓に供献されたと想定される土器は出土しなかった。

三重県埋蔵文化財調査報告115-28

一般国道23号中勢道路（13工区）建設事業に伴う

向山遺跡（第４次）発掘調査報告

（むかいやまいせき）

２００９（平成２１）年２月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印　刷　　光出版印刷株式会社